



*Il y avait moi,
Moi qui regardais [...]*

Jacqueline Salmon

Un soleil déjà oblique

Variations sur 40 poèmes de
Misuzu Kaneko

Texte "Un destin de femme"
Christine Buci-Glucksmann

Poèmes traduits du japonais par
Brigitte Allieux

ISBN 978-2-7492-5854-6
© éditions érès 2018
© Jacqueline Salmon pour les photographies
33 av. Marcel Dassault, 31500 Toulouse
www.editions-eres.com



Médiathèque Voyelle
Charleville-Mézières



Musée Tavet-Delacour
Pontoise

po&psy
a parte
érès

Sommaire

Introduction Jacqueline Salmon	8
Quarante poèmes de Misuzu Kaneko photographies de Jacqueline Salmon	12
Un destin de femme Christine Buci-Glucksmann	148
Poèmes de Misuzu Kaneko traduction de Brigitte Allieux	158
Sommaire des poèmes	170
Documents	182
Album de photographies de la famille Takahashi	189
Biographie de Misuzu Kaneko Megumi Kamo et Jacqueline Salmon	192
Journal de voyage Jacqueline Salmon	201
Bibliographie et remerciements	235



Introduction

Jacqueline Salmon

Misuzu Kaneko est née en 1903. J'ai découvert son œuvre en France à l'occasion d'un cours de japonais, et j'ai été impressionnée par la simplicité et la profondeur de ses poèmes, desquels se dégagent immédiatement des images.

L'histoire de sa vie – sujet de nombreux films au Japon – est bouleversante. On touche à travers elle à la dramatique condition d'une femme au début du xx^e siècle. Son mariage est forcé, on lui enlève son enfant, elle est empêchée d'écrire. À vingt-sept ans elle se suicide, ayant posé à côté d'elle le ticket du photographe chez qui elle avait fait faire son portrait la veille. Il faut lire les quarante poèmes choisis pour ce livre pour approcher cette expérience de la proximité de la mort et cette impuissance face à l'ordre des choses, qu'elle énonce avec tant de naturel et dans lesquelles nous reconnaissons nos propres interrogations.

Lorsque j'ai su qu'elle n'avait pas été publiée en France, j'ai fait le projet d'aller sur les lieux où elle avait vécu au sein d'une famille de libraires, au sud-ouest du Japon.

Megumi Kamo, ma professeure, est originaire d'un temple bouddhiste de la région de Senzaki, où était née la poétesse. Elle a organisé le voyage à l'automne 2014, invitée par son frère Zenjō Kamo, supérieur actuel du temple.

Les paysages, la campagne, les temples, les plages désertes, les ports de pêche, les rues et les ruelles, les intérieurs, tout semblait tel que Misuzu Kaneko avait pu le voir. À la fin du livre, un journal de voyage, raconte et illustre les rencontres et les paysages dans lesquels j'ai imaginé son regard.

En 1903, à l'époque de la naissance de Misuzu Kaneko, se pose la question de l'unification de la langue japonaise, alors enseignée dans les écoles par des textes chantés dans le style *Shōka*, avec un vocabulaire difficile à maîtriser pour des enfants dont les grands-parents s'expriment encore dans le dialecte de leur région. Les textes, à la gloire de la nation, encourageaient un sentiment patriotique, ou bien ils permettaient de mémoriser des notions de géographie, d'histoire et les mythologies héroïques, mais dans un style musical occidental. C'est en réaction que naît en 1918 – Misuzu Kaneko a alors quinze ans – le mouvement littéraire *dōyō* ("Chansons pour l'enfance"), porté par la revue *Akai Tori* créée par Miekichi Suzuki et dirigé vers l'éducation des jeunes Japonais. Face à l'influence grandissante de la pensée et des formes occidentales, des artistes et poètes s'attachent à développer chez les

enfants – parce qu’ils seront les adultes de demain – une sensibilité proprement japonaise, un goût pour la beauté des choses simples et une conscience de leur dimension spirituelle. Dans le même temps, et dans le même esprit, le mouvement *mingei*, théorisé par le penseur Yanagi Sōetsu, initie toute une génération d’artistes-artisans à la beauté et à l’esprit des objets de la vie quotidienne. C’est une période d’effervescence intellectuelle, travaillée par le mouvement *art and crafts* et par la découverte de la littérature et de la musique européennes par la génération née juste après l’ouverture du Japon.

Le grand poète Kitahara Hakushū, entré à la revue *Akai Tori* dès la première année, y publie des poèmes pour enfants. Il est chargé de rassembler les *warabé-uta*, comptines et berceuses traditionnelles. C’est lui qui reçoit les poèmes adressés par les lecteurs et décide de leur publication. Misuzu Kaneko, qui tient une petite librairie, reçoit ces revues, et elle envoie des poèmes. Elle sera plusieurs fois publiée. Certains de ses poèmes s’inscrivent tout naturellement dans le style *dōyō* très en vogue à son époque mais son œuvre dépasse largement le cadre de ce mouvement qui durera jusqu’aux prémices de la guerre, en 1936. Mais Misuzu Kaneko s’est suicidée depuis déjà six ans.

Dans *Akai Tori*, elle avait pu lire son poète préféré, Yaso Saijō, très habité par la littérature européenne et particulièrement par Lewis Carroll. Elle l’avait rencontré brièvement en 1927. Il l’avait publiée dans son recueil des plus beaux poèmes du Japon. Elle lui avait confié ses trois carnets de poésie : cinq cent douze poèmes recopiés pour son frère Masasuké, qui voulait devenir compositeur pour les mettre en musique.

En 1982, Setsuo Yazaki découvre les trois carnets confiés à Masasuké qui les gardait depuis plus de 50 ans. Il entreprend avec la maison d’édition Jula la publication de l’œuvre complète et sa diffusion. Misuzu Kaneko figure alors au programme des écoles. Elle est aujourd’hui connue dans tout le Japon.



みんなを好きに

私は好きになりたいな、
何でもかんでもみいんな。

葱も、トマトも、おさかなも、
残らず好きになりたいな。

うちのおかずは、みいんな、
母さまがおつくりなつたもの。

私は好きになりたいな、
誰でもかれでもみいんな。

お医者さんでも、鳥でも、
残らず好きになりたいな。

世界のものはみいんな、
神さまがおつくりなつたもの。





犬

うちのだりあの咲いた日に
酒屋のクロは死にました。

おもてであそぶわたしらを、
いつでも、おこるおばさんが、
おろおろ泣いて居りました。

その日、学校がっこでそのことを
おもしろそうに、話してて、
ふっとさみしくなりました。





角の乾物屋の

—わがもとの家、まことにかくありき—

角の乾物屋の

塩俵

日ざしがはっきり

もう斜

二軒目の空屋の

空俵

捨て犬ころころ

もぐれてる。

三軒目の酒屋の

炭俵

山から来た馬

いま飼葉

四軒目の本屋の

看板の

かげから私は

ながめてた。





八百屋の鳩はと

親鳩、子鳩

お鳩が三羽

八百屋の軒のきで

クックと鳴いた。

茄子なすはむらさき

キャベツはみどり

いちごの赤も

つやつや濡ぬれて。

なアにを買おぞ

しろい鳩は

知らぬかおして

クックと鳴いた。





まち

通る、通る、
春の日の街を、
通る、通る、
縦に通る。

荷馬車、荷ぐるま、
自動車、自転車。

通る、通る、
白^{みち}い^ま路^ちを、
通る、通る、
横に通る。

乞^こ食^{じき}の子^こ供^{ども}と
け^かむ^けり^りの^の影^{かげ}が。



はつ秋

涼しい夕風ふいて来た。

田舎にいればいまごろは、
海の夕やけ、遠くみて、
黒牛ひいてかえるころ。

水色お空をなきながら、
千羽がらすもかえるころ。

畠の茄子は刈られたか、
稲のお花も咲くころか。

さびしい、さびしい、この町よ、
家と、ほこりと、空ばかり。





蜂はちと神さま

蜂はお花のなかに、
お花はお庭のなかに、
お庭は土塀どべいのなかに、
土塀は町のなかに、
町は日本のなかに、
日本は世界のなかに、
世界は神さまのなかに。

そうして、そうして、神さまは、
小さな蜂のなかに。



祇園社
ぎおんしゃ

はらはら

松の葉が落ちる、

お宮の秋は

さみしいな。

のぞきの唄よ

瓦斯の灯よ、

赤い帯した

肉桂よ。

いまは

こわれた氷屋に、

さらさら

秋風ふくばかり。





洋灯らんぶ

田舎いなかのまつりに
来てみたが、
みじかい秋の
日が暮くれて、

神輿みこしの声の
遠いころ、
洋灯らんぶのくらさ
たよりなさ……。

みつめていれば
どこやらで、
ひそひそ虫が
なっている。



お祭すぎ

お祭すぎの
笛の音、
鉦や太鼓と
はなれては、

なんだかさみしい
笛の音、
紺の夜ぞらに
ひびきます。

紺の夜ぞらの
天の川、
このごろ白く
なりました。



茶
百生
此五十年歳生



祈願文
此の御祈願は、
御祭神に祈り、
御利益を蒙るに
御祈願文
御祈願文
御祈願文

伊勢神宮神券 八百円
八坂神社神券 五百円
家内安全神券 三百円
海上安全神券 三百円

尾神宮神券 五百円
身御守 五百円
安宅御守 五百円
建速安全御守 五百円

おみくじ
二十円

鯨法会

鯨法会は春のくれ、
海に飛魚採れるころ。

浜のお寺で鳴る鐘が、
ゆれて水面をわたるとき、

村の漁夫が羽織着て、
浜のお寺へいそぐとき、

沖で鯨の子がひとり、
その鳴る鐘をききながら、

死んだ父さま、母さまを、
こいし、こいしと泣いています。

海のおもてを、鐘の音は、
海のどこまで、ひびくやら。





木

お花が散って
実が熟れて、

その実が落ちて
葉が落ちて、

それから芽が出て
花が咲く。

そうして何べん
まわったら、
この木は御用が
すむかしら。



しもやけ

しもやけの

すこうしかゆい小春日に、
お背戸の山茶花咲きました。

その花折って髪にさし、

そしてしもやけ見ていたら、

ふつと、私がお嘸の、

継娘のようにおもわれて、

浅黄に澄んだお空さえ、

なにかさみしくなりました。





木屑ひろい

朝鮮人の子、何つむの、
げんげが咲いたの、よもぎなの。
いやいや、草は枯れてます。

朝鮮人の子、何うたう、
朝鮮人のお唄なの。
いやいや、日本の童謡です。

朝鮮人の子、たのしげに、
こぼれ木屑をひろいます。
製材裏の広っぱで。

木屑ひろうて、束にして、
頭にのせてかえります。

小さなお小舎で、母さんと、
とろとろ赤い火を燃して、
父さんの帰りを待ったために。





ぬかるみ

この裏ま^{うら}ちの
ぬかるみに、
青いお空が
ありました。

とおく、とおく、
うつくしく、
澄^すんだお空が
ありました。

この裏ま^{うら}ちの
ぬかるみは、
深いお空で
ありました。





つくる

小鳥は

藁で

その巣をつくる。

その藁

その藁

たあれがつくる。

石屋は

石で

お墓をつくる。

その石

その石

たあれがつくる。

わたしは

砂で

箱庭をつくる。

その砂

その砂

たあれがつくる。





明るい方へ

明るい方へ
明るい方へ。

一つの葉でも
陽の洩るところへ。

藪かげの草は。

明るい方へ
明るい方へ。

翅は焦げよと
灯のあるところへ。

夜飛ぶ虫は。

明るい方へ
明るい方へ。

一分もひろく
日の射すところへ。

都会に住む子等は。





小さなお墓はか

小さなお墓、
まあるいお墓、
おじいさまのお墓。

百日紅さるすべりの花が、
かんざしかざしになったた。
去年きょねんのことよ。

きょう来て見れば、
新しいお墓、
しろじろと立ってる。

せんのお墓、
どこへ行いった、
石屋いしやにやった。

今年ことしも花は、
百日紅さるすべりの花は、
墓はかの上に散ちってる。



口真似

——父さんのない子の唄——

「お父ちゃん、
おしえてよう。」
あの子は甘えて
いていた。

別れてもどる
裏みちで、

「お父ちゃん。」
そつと口真似
してみたら、
なんだか誰かに
はずかしい。

生垣の
しろい木槿が
笑うよう。





星とたんぽぽ

青いお空の底ふかく、
海の小石のそのように、
夜がくるまで沈んでる、
昼のお星は眼にみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

散ってすがれたたんぽぽの、
瓦のすきに、だアまって、
春のくるまでかくれてる、
つよいその根は眼にみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。



にわとり

お年をとった
にわとりは、
荒れた畑に
立っている。

わかれたひよこは
どうしたか、
畑に立って
おもってる。

草のしげった
畑には、
葱の坊主が
三四本。

よごれた、白い
にわとりは
荒れた畑に
立っている。





夢と現

夢がほんとでほんとは夢よ。

よかろうな。

夢じゃなんにも決まってる。

よかろうな。

ひるまの次は、夜だってことも、

私が王女でないってことも、

お月さんは手では採れないってことも、

百合の裡へははいれないってことも、

時計の針は右へゆくってことも、

死んだ人たちやいないってことも。

ほんとになんにも決まってるないから、

よかろうな。

ときどきほんとは夢にみたなら、

よかろうな。



不思議

私は不思議でたまらない、
黒い雲からふる雨が、
銀にひかっていることが。

私は不思議でたまらない、
青い桑の葉たべている、
蚕が白くなることが。

私は不思議でたまらない、
たれもいじらぬ夕顔が、
ひとりではらりと開くのが。

私は不思議でたまらない、
誰にきいても笑ってて、
あたりまえだ、ということが。





海とかもめ

海は青いとおもってた、
かもめは白いと思ってた。

だのに、今見る、この海も、
かもめの翅はねも、ねずみ色。

みな知ってるとおもってた、
けどもそれはうそでした。

空は青いと知ってます、
雪は白いと知ってます。

みんな見えます、知ってます、
けれどもそれもうそかしら。





空の色

海は、海は、なぜ青い。
それはお空が映るから。

空のくもっているときは、
海もくもってみえるもの。

夕焼、夕焼、なぜあかい。
それは夕日があかいから。

だけとお昼のお日さまは、
青かないのに、なぜ青い。

空は、空は、なぜ青い。



王子山
おうじやま

公園になるので植えられた、
桜はみんな枯れたけど、

伐られた雑木の切株にや、
みんな芽が出た、芽が伸びた。

木の間に光る銀の海、
わたしの町はそのなかに、

龍宮みたいに浮んでる。

銀の瓦と石垣と、
夢のようにも、霞んでる。

王子山から町見れば、
わたしは町が好きになる。

干鰯のおいもここへは来ない、
わかい芽立ちの香がするばかり。





おさかな

海の魚はかわいそう。

お米は人につくられる、
牛は牧場で飼われてる、
鯉もお池で麩を貰う。

けれども海のおさかなは、
なんにも世話にならないし、

いたずら一つしないのに、
こうして私に食べられる。

ほんとに魚はかわいそう。





大漁

朝焼小焼だ

たいりょう
大漁だ

おおばい
大羽鱈の

大漁だ。

浜はまつりの

ようだけど

海のなかでは

何万の

鱈のとむらい

するだろう。





蓮はすと鶏にわとり

泥どろのなかから
蓮が咲さく。

それをするのは
蓮じゃない。

卵たまごのなかから
鶏とりが出る。

それをするのは
鶏じゃない。

それに私わたしは
気がついた。

それも私の
せいじゃない。





月日貝

西のお空は
あかね色、
あかいお日さま
海のなか。

東のお空
真珠いろ、
まるい、黄色い
お月さま。

日ぐれに落ちた
お日さまと、
夜あけに沈む
お月さま、
逢うたは深い
海の底。

ある日
漁夫にひろわれた、
赤とうす黄の
月日貝。



海の果て

雲の湧くのはあすこいら、
虹の根もともあすこいら。

いつかお舟でゆきたいな、
海の果てまでゆきたいな。

あまり遠くて、日が暮れて、
なにも見えなくなっちゃって、

あかいなつめをもぐように、
きれいな星が手で採れる、
海の果てまでゆきたいな。





雪に

海にふる雪は、海になる。
街まちにふる雪は、泥どろになる。
山にふる雪は、雪でいる。
空にまだいる雪、
どオれがお好き。



月の出

だまって

だまって

ほうら、出ますよ。

お山の

ふちが

ほうっと明るよ。

お空の

底と

海の底とに、

なにか

光が

溶けていますよ。





鯨捕り

海の鳴る夜は

冬の夜は、

栗を焼き焼き

聴きました。

むかし、むかしの鯨捕り、

こここの海、紫津が浦。

海は荒海、時季は冬、

風に狂うは雪の花、

雪と飛び交う銚の縄。

岩も礫もむらさきの、

常は水さえむらさきの、

岸さえ朱に染むという。

厚いどてらの重ね着で、

舟の軸に見て立って、

鯨弱ればたちまちに、

ぱっと脱ぎすて素っ裸、

さかまく波におどり込む、

むかし、むかしの漁夫たち――

きいてる胸も

おどります。

いまは鯨はもう寄らぬ、

浦は貧乏になりました。

海は鳴ります、

冬の夜を、

おはなしすむと、

気がつく――

神さまがおつくりなったもの。



魚市場

瀬戸せとに

渦うずまく

夕潮ゆうしほ

とおく

とどろく

夕暗ゆうやみ

市のひけた

市場に、

海からかけが

のぞくよ。

子供こどもは、子供は、

どこにと、

何か、何か、

のぞくよ。

秋刀魚さんまの色した

夕ぞら、

烏からすが啼なかずに

わたるよ。





浜^{はま}の石

浜辺の石は玉のよう、
みんなまるくてすべっこい。

浜辺の石は飛び魚か、
投げればさっと波を切る。

浜辺の石は唄^{うた}うたい、
波といちにち唄^{うた}ってる。

ひとつびとつ^つの浜の石、
みんなかわいい石だけど、

浜辺の石は偉^{えら}い石、
皆^{みんな}して海をかかえてる。



墓^{はか}たち

墓場のうらに、
垣根^{かきね}ができる。

墓^{はか}たちは

これからは、
海がみえなくなるんだよ。

こどもの、こどもが、乗っている、
舟^{ふね}の出るのも、かえるのも。

海^{うみ}辺^べのみちに、
垣根^{かきね}ができる。

僕^{ぼく}たちは

これからは、
墓^{はか}がみえなくなるんだよ。

いつもひいきに、見て通る、
いちばん小さい、丸いのも。





海の色

朝はぎんぎら銀の海、
銀はみんなを黒くする。
ランチの色も、帆の色も、
銀の破れめもみな黒い。

昼はゆらゆら青い海、
青はみんなをあるままに。
うかぶ藻くず、竹のきれ、
バナナの皮も、あるままに。

夜はしずかな黒い海、
黒はみんなをおいかくす。
船はいるやら、いないやら、
赤い灯のかけばかり。



繭とお墓まゆはか

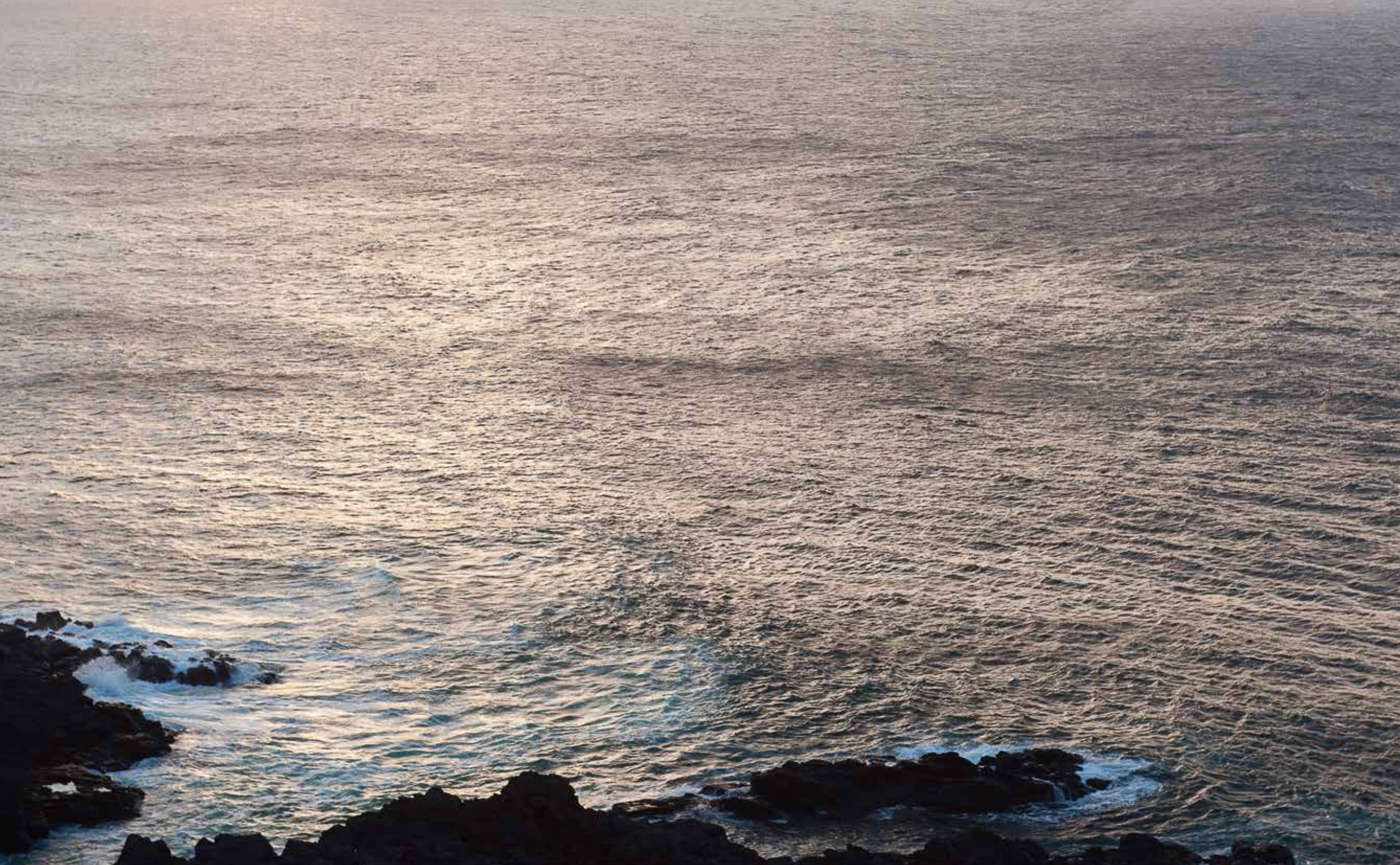
蚕は繭にかいこまる
はいります、
きゆうくつそうな
あの繭に。

けれど、蚕は
うれしかろ、
蝶々ちようちようになつて
飛べるのよ。

人はお墓へ
はいります、
暗いさみしい
あの墓へ。

そして、いい子は
翅はねが生え、
天使になつて
飛べるのよ。





見えないもの

ねんねした間になにがある。

うすももいろの花びらが、
お床とこの上に降り積り、
お目々さませば、ふと消える。

誰だれもみたものないけれど、
誰がうそだといいました。

まばたきするまに何がある。

白い天馬が翅はねのべて、
白羽の矢よりもまだ早く、
青いお空をすぎてゆく。

誰もみたものないけれど、
誰がうそだといえましょう。





Un destin de femme

Christine Buci-Glucksmann

*Il y avait moi,
Moi qui regardais...*

有時 *Yūgi* – Le temps-existence

Mais que regardait-elle dans l'ombre de la librairie ? La mer argent, bleu dansant ou noire. Le ciel avec ses mouettes, bleu ou jaune pâle, prises dans l'indigo de la nuit.

Et puis le cycle des saisons, ce temps éphémère du Japon, le *mujō* de l'impermanence. Ici un lilas d'été, ici l'arbre qui refléurit, ici les lumières plus chancelantes de l'automne. Et puis toutes les clartés, vers cette invisibilité poétique : voir la lumière dans la boue.

Car dans ce regard de Misuzu Kaneko, il y avait toujours une incertitude existentielle, celle de la vérité, entre rêve et réalité.

Mais entre le rêve et la réalité de ses poèmes, il y avait un destin de femme, avec tout son récit de vie : le *yūgi*, le temps-existence, avec son itinéraire et ses tragédies.

Elle est née en 1903. À trois ans, elle perd son père, décédé lors d'un voyage en Chine, et son petit frère Masasuké, qui est adopté par sa tante et son oncle. Un trauma indélébile, redoublé dans un jeu de miroirs et de mensonges. La dissimulation de la vérité créera une situation inextricable lorsque le jeune frère tombera plus tard amoureux de sa sœur, elle seule sachant la vérité.

Elle vit son enfance et son adolescence avec sa mère, sa grand-mère et son frère aîné, dans la librairie de Senzaki qui appartient à son oncle et qui a été donnée en gérance à sa mère.

Senzaki, où elle est née, est une petite ville avec ses maisons traditionnelles, ses ruelles, son temple, ses activités quotidiennes, son grand port de pêche et, au loin, l'infini maritime.

Puis sa tante décède, emportée par une épidémie de grippe espagnole, et son oncle, se retrouvant veuf, épouse la mère de Misuzu, qui le suit à Shimonoseki, devenant ainsi la belle-mère de son propre fils. Lorsque son frère aîné se marie, Misuzu les rejoint.

Shimonoseki est une très grande ville au sud-ouest du Japon, face à la Chine, avec ses cinémas, ses magasins, ses cultures multiples.

Misuzu a vingt ans, elle a fait le collège et réussi brillamment ses études. Son oncle lui donne en gérance la petite succursale de la grande librairie qu'il possède.

Les livres, donc. Elle lit, lit et lit, et elle écrit ses premiers poèmes. Elle découvre les nombreuses revues littéraires du mouvement *Dōyō*, très en vogue à cette époque.

Dans un esprit de développement de la jeunesse, plusieurs grands poètes écrivent des poèmes et des chansons destinés à l'éveil des enfants, à la pratique d'une belle langue japonaise et au développement d'une pensée poétique et rêveuse.

Misuzu envoie ses poèmes et beaucoup sont publiés.

Puis arrive l'année 1925, un tournant de vie et une seconde tragédie. Masasuké, qui a maintenant 19 ans, tombe amoureux de sa sœur, persuadé depuis toujours qu'elle est sa cousine. On arrange alors un mariage avec un nouvel employé de la librairie Miyamoto. On saura très vite que c'est un coureur invétéré, qui fréquente les maisons de plaisirs. Il transmettra la syphilis à Misuzu. Enceinte, celle-ci écrit poèmes sur poèmes mais rapidement son mari lui interdira d'en écrire, d'en envoyer à des revues et même de correspondre avec d'autres poètes.

Elle donne naissance à une petite fille. De plus en plus malade, de plus en plus blessée par la vie de débauche de son mari, elle supplie sa famille de l'autoriser à divorcer. Mais le père, comme il est de coutume à cette époque, obtient la garde de sa fille.

Le 10 mars 1930, elle va chez un photographe faire faire son portrait. Ayant posé le ticket à côté d'elle, elle se suicide avec des somnifères, espérant ainsi par ce geste que l'enfant sera élevée par sa grand-mère.

Elle laisse ses poèmes et son image, déformée, altérée par les tragédies et par cette mort toujours présente qui a hanté de sa mélancolie le fond de fragilité et d'invisibilité de sa poésie.

常 *Mujō* – Le temps de l'impermanence

Refaire ce parcours, retourner dans les lieux de sa vie, presque intacts, à Senzaki, rencontrer des descendants de sa famille et découvrir l'extraordinaire aura poétique de Misuzu Kaneko au Japon : tel fut le parcours de Jacqueline Salmon.

Si bien qu'entre les poèmes et les photographies, une même poétique du temps se construit, nous laissant découvrir peu à peu la beauté poignante des choses fragiles. Ce qui est dans le cœur et qu'on ne peut pas dire, le *yūgen* japonais.

Les lieux d'abord, que toute la culture japonaise a valorisés comme la forme même d'un voyage-vie. Des lieux cosmiques où le regard s'égaré et se perd. La mer, le vent, les vagues, la lune et le soleil, tous proches du travail de Jacqueline Salmon : *Du vent, du ciel, et de la mer*. Nuées éphémères, ciels d'orages et de naufrages, marée basse ou haute, et toutes les variations de la vague à travers les peintres : Courbet, Boudin ou Monet.

Ici, son regard explore cette mer du temps, comme en écho des poèmes :

La mer, la mer, pourquoi ce bleu ?

Le ciel, le ciel, pourquoi est-il bleu ?

Comme s'il s'agissait "d'entrer au service des nuages" (Ruskin) et de tout ce qui apparaît et disparaît soudainement dans sa propre fragilité.

Le temps, ce temps de l'impermanence (le *mujō*) que j'ai découvert au Japon, imprègne tout de la mélancolie insidieuse du présent. C'est ce temps-devenir qui habite les flux, les cycles de la nature, les saisons, les floraisons des cerisiers, les cascades des jardins ou les variations des poèmes zen, car "nous sommes tous des passants". Aussi ne reste-t-il qu'à "saisir la fleur de l'instant présent", à "accueillir l'esprit de la vague" ou à "chevaucher l'ouragan".

Je me souviens toujours de cette pièce entièrement peinte de vagues du temple Nischi Hongwan, à Kyoto. En expansion ou calmes, les vagues libéraient la pièce de toute pesanteur, dans la profondeur fluide, courbe et sans horizon d'un monde flottant.

Un monde flottant, celui de l'éphémère où photographies et poèmes se renvoient l'un à l'autre.

Mais à la différence de l'Occident qui a développé un éphémère mélancolique, celui de Hamlet ou de Baudelaire, le *mujō* japonais, cette impermanence de toutes choses, relève d'un éphémère positif et cosmique. Celui des passages du temps, de la mort dans la vie, et celui du "don du temps" cher à Dōgen : sa répétition-variation et son renouveau permanent.

Car s'il y a une grâce du non-dit, du suggéré, du "juste capté" et du secret, c'est sans doute parce que l'impermanence suscite l'ambivalence d'un mélange de tristesse et de plaisir, propre à ce qu'on appelle le *Sabi*.

Il est un mot japonais qui m'a toujours fascinée et qui résume à lui tout seul une esthétique qui est une éthique : *ma*. Tout à la fois le vide, l'intervalle et le passage. L'opposé de tous les dualismes métaphysiques occidentaux entre l'être et le néant, puisque le vide, si présent dans la culture japonaise, est à la fois un intervalle et un passage. Il sépare, relie et installe une respiration, une fluctuation, une modulation qui est la forme même du temps et de cette "éthique du vide" qu'analysait Roland Barthes.

De multiples passages, donc, comme dans l'itinéraire photographique de Jacqueline Salmon : passage cosmique de la lumière entre le premier plan de rochers et l'infini maritime, ou entre un soleil minuscule, perdu dans le lointain, et son double flottant et artificiel ; passages floraux, fleurs et branches emmêlées comme dans un *ikebana* ; passage de vie, telle la ronde des poissons.

Et, partout, ces entre-deux esthétiques que suscite le *ma*, dans les estampes (les *ukiyo-e* ou "mondes flottants") comme dans l'architecture, en créant des liens entre les codes et les manières. Liens poétiques, comme la rencontre du soleil et de la lune "au fond de la mer". Ou ce mystère qui gît là, dans les "étincelles d'argent" de la pluie tombant des nuages.

Mais le véritable *ma* n'est pas seulement dans les poèmes et les photographies. Il est dans l'écart entre le rêve et la réalité propre à toute création, à sa lumière comme à sa part d'ombre. Une ombre légère, avec ses "résonances inexprimables" chères à Tanizaki dans son *Éloge de l'ombre*. Alors "Le beau n'est pas une substance en soi mais rien qu'un dessin d'ombres, qu'un jeu de clair-obscur produit par la juxtaposition de substances diverses." Une beauté "fantomatique" qui traverse tout, de ses lumières de rêve et de sa clarté diffuse. Comme dans le poème "Rêve et réalité" :

*Vraiment si rien n'était jamais fixé
Ce serait merveilleux
Voir de temps en temps la vérité en rêve
Ce serait merveilleux.*

La recherche de cette lumière précaire et indirecte imprègne tout d'une même poésie du temps. Comme si voir était toujours entrevoir, pratiquer "une vision différée".

Car c'est bien par la lumière que commence le voyage-vie. Une lumière qui surgit de la boue et inonde les ténèbres, comme dans les trois photographies de cette odyssée qu'est "Là ou il y a de la lumière". Tout d'abord, une lumière diffuse qui met au jour un sol craquelé de boue ; et puis cette lumière cosmique qui inonde la mer comme un reflet ou un miroir, qui la métamorphose et contraste avec les montagnes noires et les quelques pierres, sombres elles aussi. Là, un oiseau solitaire semble attendre le lever de la lune. Enfin, l'entrée plus violente de la lumière, qui semble investir de son coin une plage déserte et des espaces sombres indéfinissables.

Lumière douce, lumière contrastée et lumière presque violente : la lumière est sans doute le lieu d'une véritable quête poétique où, comme les insectes, on risque de se brûler les ailes ou de se perdre. Une quête souvent empreinte d'une certaine mélancolie existentielle. Car la part d'ombre est toujours là, flottante, envahissante voire dangereuse. De fait, si l'œil japonais est souvent net dans sa ligne-couleur et sa nudité, qui plairont tant à Van Gogh, il peut aussi se perdre dans le "semi-formel" (*gyo*) des spirales, des vagues et de tout le "nuagisme" du temps.

Dès lors, revendiquer la lumière, est-ce fuir ou chercher son contraire apparent, l'invisibilité ? Ou plutôt, dans la poésie des nuages, l'art des plis et les savoirs des surfaces, l'invisible japonais ne relève-t-il pas d'un même plan d'immanence cosmique ?

幽玄 *Yūgen* – Vers l'invisible

La langue japonaise dispose de nombreux mots pour énoncer ce qui échappe à l'énonciation comme au visible, dont un tout particulièrement : le *yūgen*. Terme d'origine chinoise, il couple le mystère et l'obscurité, et renvoie à une beauté subtile et cachée, celle du théâtre *Nō* avec ses revenants, ses morts et ses démons

toujours masqués, entre paraître et disparaître dans l'insaisissable de l'Idée. "Le *yūgen* c'est ce qui demeure dans le cœur sans pouvoir être dit. La lune couverte de fins nuages, les feuilles rougies des arbres, les montagnes voilées d'automne, voilà les images du *yūgen*", écrit Jacqueline Pigeot dans *Questions de poésie japonaise*. Cette beauté subtile du suggéré, du juste capté et du pourtant là traverse toute la poésie de Misuzu Kaneko. Elle écrit ce qu'elle voit mais ce qu'elle voit s'échappe, comme "la fleur du vide" du zen. Aussi l'invisible ne relève-t-il pas d'un Dieu transcendant et créateur. Il est comme la doublure et l'enveloppe infinie de toute chose. Telle une pensée fugitive, un instant fugace, une ombre changeante, des plans avec leurs entre-plans invisibles, semblables au sommeil avec "*ses pétales couleur pêche*" du poème "L'invisible". Aussi :

*Des étoiles dans le ciel diurne nous restent invisibles,
Elles sont invisibles mais pourtant elles existent.*

Mais alors comment passe-t-on du visible à l'invisible ? Dans leur parcours, les photographies nous proposent un voyage dans cette invisibilité : caché/montré du Bouddha qui apparaît dans ses tentures d'un rouge flamboyant ou petites enveloppes des sculptures qui me rappellent irrésistiblement le temple des Inari de Kyoto, avec ses passages de *torii* laqués et ses multiples renards avec leur faux bavoir. Ici comme ailleurs, l'enveloppe dissimule pour mieux laisser voir. Comme cette invisibilité des intérieurs avec leur trame géométrique qui laisse juste entrevoir une lumière diffuse et comme exténuée.

Enveloppe, seconde peau, transparence et touches d'ombre, l'invisible ne relève plus d'une ontologie au sens occidental mais bien d'une topologique. Elle ouvre un lieu, elle est un lieu, comme dans les spectacles de *Nō* chers à Zeami, lui qui écrivait : "Le beau, c'est le caché."

有時 *Uji* – Avant / après, se souvenir : l'être-temps

Elle dit :

Je me souviens.

C'était le printemps, un de ces printemps où le son de la cloche du temple *shintō* se confond avec les murmures des vagues. C'était un souvenir presque mélancolique, comme ce baleineau qui pleurait ses parents morts. Mais moi

j'étais déjà loin, dans l'infini de la mer et du monde, où je me survivais.

Non, c'était plutôt l'automne et la fête du village. Des lampes tremblantes, soudainement mêlées à la nuit d'hiver. Une mer démontée, de la neige partout, et cette eau violette, couleur du Japon.

Tout se chevauche, tout se mélange dans ma mémoire ourlée d'oublis.

Et soudainement :

Il y avait moi

Moi qui regardais

C'était une tombe, une toute petite tombe blanche. Avant ou après ? C'était une tombe pleine de lilas d'été éparpillés, une tombe claire et presque rayonnante de ses fleurs. Celle de mon grand-père ? ou la mienne plutôt ?

Et dans mon rêve surgissaient des pages, des milliers de pages, et même toute une librairie. Je suis née là, dans ces pages, et j'y serai à jamais.

Comme le soleil se noie à l'oblique dans la mer à Senzaki et revient toujours, je peux me perdre entre rêve et réalité, devenir invisible, mais je reviendrai toujours. Là, dans mon écriture qui défie la mort et le temps.

Alors nous regardons : la lumière tremblante d'une maison longeant les tombes, la mer se brisant aux abords d'immenses falaises et cette tombe, telle un œuf de pierre surgissant de la végétation et du vide.

Et puis ce panneau d'écriture japonaise, ce panneau-mémoire vieilli par le temps mais toujours là : l'être-temps (*Uji*) de Misuzu Kaneko dans le regard de Jacqueline Salmon – avec toute l'ambiguïté du terme : en effet, selon la prononciation, *Uji* signifie "être-temps" ou "par moments".

Elle et nous : deux regards, voire un entre-deux des regards, où surgit une véritable "poétique de l'itinéraire" (*kakekotoba*). Car ici et là, dans l'immensité comme dans l'imperceptible des choses minuscules, "il ne faut pas se lasser de regarder" (*miredo akazu*). Si bien que le regard lui-même devient la forme du temps, sa poétique et sa philosophie.

Je me souviens : c'était lors de mon séjour à Kyoto et à Tokyo pour écrire un livre, *L'esthétique du temps au Japon*. Dans ce voyage, une image m'a poursuivie. Cette photographie de la Dame du *Dit du Genji*, que j'avais prise dans le temple près de Kyoto où elle écrivit son merveilleux roman. Masque blanc sur fond sombre, regard de biais, vêtements imprimés du kimono et puis ce grillage froid et mat la

séparant de moi. Au fil des jours, elle est devenue ma passeuse. Elle m'indiquait le chemin à parcourir, que j'ai bientôt retrouvé partout, de Tokyo à Sendai, de Kyoto à Hiroshima. Car dans ce visage de Murasaki Shikibu, qui avait inventé la littérature et entrelacé le roman au statut des femmes, je voyais, comme derrière un écran ou un filtre, l'inextricable mélange de visibilité et de mystère qui habite le Japon.

Et j'y voyais aussi cette figure du temps qu'elle avait elle-même inventée et pratiquée : *mono no aware*, la beauté poignante des choses fragiles. Et j'ai alors compris que toute vision requiert "un esprit flottant", un "esprit du diamant", pour pénétrer le cosmos et toutes les strates du temps. Une conscience fragile d'exister, dans l'écoulement d'un temps où l'œil fluide et l'impermanence du monde se conjuguent.

Tout est donc dans le temps, et le temps est toute existence : chaque singularité pré-individuelle – cette pierre, ce bambou, cette fleur – et chaque instant. Entre le *ji* (temps) et le *yū* (existence) il y a une immanence telle que chaque chose comporte son propre temps-existence : *yūji*. C'est pourquoi le temps n'est jamais abstrait ni transcendant, il unit le microcosme et le macrocosme dans l'énergie d'un auto-développement fait de rythmes, de respirations, d'intensités, de vitesse ou de lenteur : "Bien que la lune soit large et lumineuse, elle se loge dans une petite goutte d'eau avec le ciel entier." Et "La montagne et la mer engendrent chacune leur temps-existence."

Car, comme le voulait Dōgen, tout est temps.

"Le rat est temps

Le tigre est temps

La vie est temps."

40 poèmes

de Misuzu Kaneko

La Boue

Dans la boue
De ce quartier pauvre
Il y avait
Le ciel bleu

Haut, très haut,
Très beau
Il y avait
Le ciel limpide

Mais dans ce quartier délaissé
La boue
Était
La profondeur du ciel

Là où il y a de la lumière

Là où il y a de la lumière
Là où il y a de la lumière

Même une feuille
Va à l'endroit où filtre le soleil

Et l'herbe aussi cachée dans les broussailles

Là où il y a de la lumière
Là où il y a de la lumière

Au risque de se brûler les ailes
Vont vers les lampes

Les insectes qui volent dans la nuit

Vers la lumière
Vers la lumière

Vers un endroit où ne serait-ce qu'un instant
Coule à flots le soleil

Vont les enfants qui habitent les villes

Le Marchand de légumes et de pois secs du coin de la rue

– Voici comment était vraiment mon ancienne maison

À l'angle, le marchand de légumes et de pois secs,
Et ses balles de sel
Sur lesquelles tombait
Un soleil déjà oblique

Dans la deuxième maison inhabitée,
Des sacs vides
Entre lesquels se glissait
Boitillant un chien abandonné

Dans la troisième maison celle du marchand de saké
Des sacs de charbon de bois
Et un cheval, de retour de la montagne,
À son fourrage

Puis dans l'ombre de l'enseigne de la librairie,
La quatrième maison,
Il y avait moi,
Moi qui regardais

La Ville

Passent, passent
À travers la ville un beau jour de printemps
Passent, passent
Passent du nord au sud

Les chariots les carrioles
Les voitures les vélos

Passent, passent
Dans les rues blanches, blanches
Passent, passent
Passent d'est en ouest

Les enfants des mendiants
Et les ombres des fumées

Début d'automne

Le vent frais du soir s'est mis à souffler.

Si j'étais au village maintenant ce serait le moment
Où on verrait au loin le soleil couchant sur la mer,
Le moment où attaché à la longe qui le tire,
Rentrerait le bœuf noir

Ce serait le moment où rentreraient les corbeaux freux
En criant à travers un ciel encore bleu

Les aubergines du champ, auront-elles été ramassées ?
Est-ce le moment où le riz lui aussi est en fleurs ?

Triste, triste est cette ville !
Rien que maisons... poussière... et ciel...

Les Pigeons et le Marchand de légumes

Un couple de pigeons et son pigeonneau
Trois pigeons
Sur l'auvent du marchand de légumes
Roucoulaient « rou rou rou »

Le violet des aubergines
Le vert des choux
Et même le rouge des fraises
Couleurs mouillées toutes brillantes de pluie !

« Qu'allons-nous donc acheter ?... »
Roucoulaient
Les blancs pigeons
Sur l'auvent du marchand de légumes

Les Poissons

Les poissons de la mer sont bien à plaindre.

Le riz est redevable aux hommes
Les vaches sont élevées dans des prairies
Et jusqu'aux carpes des étangs qui reçoivent leur noble pitance

Mais les poissons des mers, eux,
Ne reçoivent aucune aide
Ni ne nous jouent aucun mauvais tour
Et pourtant voilà que je les mange

Vraiment les poissons de la mer sont bien à plaindre

La Poule

Une vieille poule se tenait debout sur ses pattes,
Dans un champ abandonné

Ses poussins partis si loin d'elle que devenaient-ils ?
Debout dans le champ, ainsi songeait-elle

Dans le champ aux herbes folles
Trois ou quatre ombelles d'oignons...

Une vieille poule sale et blanche
Debout sur ses pattes dans le champ à l'abandon

Aimer

Je voudrais aimer
Tout absolument tout

Les poireaux, les tomates, le poisson aussi
Tout pouvoir aimer, sans rien laisser

Tout ce que cuisine maman
Tous les petits plats qu'elle prépare

Je voudrais aimer
Tout le monde, et celui-ci, et celui-là

Le médecin tout comme le corbeau noir
Je voudrais tout aimer sans rien laisser

Le monde entier
Tout ce que firent les dieux

Le Ramasseur de chutes de bois

Petit enfant coréen que ramasses-tu ?
Des astragales fleuries ou bien des armoises ?
Non... non les plantes ont fané

Petit enfant coréen que chantes-tu ?
Un air de Corée ?
Non... non une chanson du Japon

L'enfant coréen d'un air réjoui
Ramasse des chutes de bois tombées là
Sur la place derrière la scierie

Des chutes de bois qu'il attache en fagots,
Qu'il pose sur sa tête pour rentrer chez lui.
Dans leur pauvre cabane, avec sa mère
Il allume un maigre feu de flammes rouges
Pour attendre le père

Mimétisme

– Chanson d'un enfant qui n'a pas de père

« Papa ! Papa !
Explique-moi »
Disait cet enfant
D'un petit air câlin

Rentrant chez moi après l'avoir quitté
Dans une petite rue à l'écart
« Papa ! Mon petit papa ! »
Doucement
Je commençais à l'imiter

Oh ! Si quelqu'un m'entendait
Pensais-je, un peu honteuse

Dans la haie vive
L'hibiscus aux fleurs blanches
Semblait sourire

L'Abeille et les Dieux

Abeilles au cœur des fleurs
Fleurs dans les jardins
Jardins entourés de murs en terre
Murs dans les villages
Villages au cœur du Japon
Japon dans le monde
Monde au sein des dieux

Puis, puis... les dieux
Au cœur des frêles abeilles

L'Arbre

Les fleurs s'éparpillent
Les fruits mûrissent

Qui tombent à leur tour
Comme les feuilles tombent ensuite

Puis des bourgeons naissent
Et l'arbre refléurit

Combien de temps encore faudra-t-il
Pour que sa peine finisse ?

Le Cocon et la Tombe

Le ver à soie entre
Dans son cocon
À l'étroit, dirait-on
Dans ce cocon

Le ver à soie
Est tout heureux sans doute

Car devenu papillon
Il pourra s'envoler

L'homme entre
Dans une tombe
Dans une tombe
Sombre et triste

Mais aux bons enfants
Il poussera des ailes
Et devenus des anges
Ils pourront s'envoler

Les Lotus et Les Poussins

C'est dans la boue
Que fleurissent les lotus

Mais s'ils le font
Ils n'y sont pour rien

C'est des œufs
Que sortent les poussins

Mais s'ils le font
Ils n'y sont pour rien

Et si moi
j'ai conscience de tout cela

Je n'y suis moi non plus
Pour rien

Le Temple shintoïste Gion

En s'éparpillant
Tombent les aiguilles de pin
L'automne en ce temple
Est triste, oh si triste

Chansons de bateleurs
Flammèches du gaz des lampions
Canneliers
Ceints de leur large ceinture rouge

Aujourd'hui
Sur l'échoppe délabrée du marchand de glaces
Seul souffle en sifflant
Le vent d'automne

Pêche miraculeuse

Premières lueurs de l'aube
Au retour d'une grande pêche
D'une grande pêche de sardines

Jour de fête sur le rivage
On dirait
Mais dans la mer
Ce sont peut-être
Les funérailles
De milliers et milliers de sardines

La Lampe

J'étais venue
À la fête du village
Mais déjà le bref jour d'automne
Déclinait

Alors que les cris des porteurs du palanquin sacré
Se faisaient plus lointains
Dans la faible clarté des lampes
Si incertaines...

Qui fouillaient l'obscurité
Çà et là se devinaient
Des insectes qui doucement
Grésillaient

Gerçures

Par un beau jour d'automne rappelant le printemps
Alors que mes gerçures me picotaient un peu
Le camélia de derrière la maison avait fleuri

J'en coupai une fleur pour la mettre dans mes cheveux
Et voyant mes gerçures
Il me sembla soudain être la pauvre bru
Des vieux contes d'autrefois...

Jusqu'au ciel transparent de jaune pâle
Qui en fut vaguement attristé

L'Invisible

Qu'est-ce qui se passe pendant qu'on dort ?

Des pétales couleur pêche
S'amoncellent sur le lit
Mais dès qu'on ouvre les yeux, plus rien, tout disparaît

De ce que personne n'a jamais vu
Qui peut dire que ce soit un mensonge ?

Qu'y a-t-il dans un battement de paupières ?

Un cheval blanc déploie ses ailes
Plus rapide encore que la flèche aux plumes immaculées
Il passe et disparaît dans le bleu du ciel

Des choses que personne n'a jamais vues
Qui peut dire qu'elles n'existent pas ?

Le mont Ōjiyama "Montagne du Prince"

Pour faire un parc, on avait planté
Des cerisiers, qui tous moururent

Mais des souches broussailleuses qui en étaient restées
Poussèrent des rejets qui tous donnèrent des bourgeons

À travers les arbres, brille une mer argentée,
Sur laquelle mon village
Flotte comme le Palais du Dragon

Les tuiles argentées et les murets en pierres,
Comme dans un rêve restaient voilés

Quand je vois mon village du mont Ōjiyama,
Je me prends à l'aimer

L'odeur des sardines séchées n'arrive pas jusque-là
Et seul se fait sentir le parfum des jeunes bourgeons.

Après la fête

La fête finie
S'éloigner du son des flûtes
Des clochettes et des tambours
A quelque chose de triste

Le son d'une flûte
Résonne encore
Dans l'indigo de la nuit

Mais dans l'indigo de la nuit
La Voie lactée
À ce moment-là
Avait blanchi

Rêve et Réalité

Si le rêve était réalité et la réalité rêve
Ce serait merveilleux, non ?

Puisque dans le rêve rien n'est jamais fixé
Tout serait merveilleux, non ?

Après le jour ne viendrait pas la nuit
Et – qui sait ? – moi qui ne suis pas une reine...

La lune, on pourrait l'attraper
On pourrait peut-être même entrer dans le cœur d'un lys

Les aiguilles de l'horloge tourneraient dans l'autre sens
Les morts seraient toujours là

Vraiment si rien n'était jamais fixé
Ce serait merveilleux
Voir de temps en temps la vérité en rêve
Ce serait merveilleux

Faire

Les oiseaux
Avec de la paille
Font leurs nids
 Cette paille
 Cette paille
 Qui fait cette paille?

Le tailleur de pierre
En pierre
Fait des tombes
 Ces pierres
 Ces pierres
 Qui donc fait ces pierres ?

Moi,
Avec du sable
Je fais un jardin miniature
 Ce sable
 Ce sable
 Qui fait ce sable ?

Le Chien

Le jour où fleurirent les dahlias de chez nous
Noiraud, le chien du marchand de saké, mourut

Sa maîtresse qui sans cesse nous grondait
Nous qui jouions dans la rue
Sa maîtresse pleurerait maintenant à gros sanglots

Ce jour-là à l'école
On s'en amusa

Mais soudain je me sentis toute triste

Les Tombes

Derrière le cimetière
On va planter une haie

Les tombes
Désormais
Ne pourront plus voir la mer

Ni voir les enfants des enfants prendre la mer
Ni leurs bateaux sortir ou rentrer au port

Sur le chemin de la plage
On va planter une haie

Et nous
Désormais
Nous ne pourrions plus voir les tombes

Même celle qu'avec amour nous regardions en passant
La plus petite, la plus ronde

Marché aux poissons

Dans le bras de mer
Déferle
La marée du soir

Qui au loin
Gronde
Au crépuscule

Sur la criée fermée,
La halle aux poissons de la ville
Une ombre venue de la mer
Se penche soudain

« Les enfants ? Où sont les enfants ? »
Quelque chose, quelque chose
Se penche soudain,

Dans le ciel nocturne
Couleur de maquereaux argentés,
Les corbeaux sans un cri
Passent !

Les Couleurs de la mer

Le matin la mer est tout éblouissante d'argent
Mais cet argent noircit tout
Les barques la couleur des voiles
Les stries mêmes des vagues argentées toutes sont noires.

La journée la mer est d'un bleu dansant
D'un bleu qui laisse tout tel quel
Pailles flottantes tiges de bambous
Peaux de bananes tout demeure en l'état

La nuit la mer est calme et noire
D'un noir qui recouvre tout
Y a-t-il des bateaux ? ou non ?
Seulement le halo des lumières rouges

Une toute petite tombe

Une petite tombe
Une tombe toute ronde
La tombe d'un grand-père

Les fleurs du lilas d'été
Me servaient d'épingle à cheveux
C'était l'année dernière !

Aujourd'hui quand je reviens
Une nouvelle tombe
Se dresse là toute blanche

La tombe ancienne
Où l'a-t-on emportée ?
On l'a donnée au marbrier

Cette année encore les fleurs
Du lilas d'été
S'éparpillent sur les tombes

Les Galets du rivage

Les galets de la plage sont comme du jade
Tous ronds et bien lisses

Les cailloux de la plage sont-ils des poissons volants ?
Qu'on les lance et d'un coup ils lacèrent les vagues

Les galets du rivage chantent leur chanson
Ils chantent tout le jour avec les vagues

Tous autant qu'ils sont les cailloux du rivage
Sont bien jolis oui mais pas seulement

Les galets du rivage sont des héros
Ensemble ils portent la mer

La Mer et les Mouettes

La mer je pensais qu'elle était bleue
Les mouettes qu'elles étaient blanches

Mais maintenant que je les regarde cette mer
Et les ailes des mouettes sont grises

Je pensais tout savoir
Mais ce n'était pas vrai

Je sais que le ciel est bleu
Et que blanche est la neige

Tout voir tout savoir !
Pourtant ça non plus ce n'est pas vrai peut-être

Au bout de la mer

Là où surgissent les nuages là-bas
Là où naît aussi l'arc-en-ciel là-bas

Un jour, en bateau, j'irai
Jusqu'au bout de la mer j'irai

Même si c'est très loin si la nuit commence
Si l'on n'y voit plus rien

Comme l'on cueille le jujube rouge
Je cueillerai de mes mains les belles étoiles
Un jour j'irai au bout de la mer

Les Couleurs du ciel

La mer, la mer, pourquoi ce bleu ?
Mais parce que le ciel s'y reflète

Se couvre-t-il de nuages ?
Et la mer aussi semble s'obscurcir

Le couchant, le couchant, pourquoi rougeie-t-il ?
Mais parce que le soleil du soir est rouge

Pourtant... le soleil dans la journée n'est pas bleu
Alors pourquoi le ciel est-il bleu ?

Le ciel, le ciel, pourquoi est-il bleu ?

Le Coquillage "Lune-Soleil"

Dans le ciel de l'ouest
Couleur garance
Un soleil écarlate
Va dans la mer

Dans le ciel de l'est
Couleur de perle
Ronde et jaune
La lune

Le soleil
Tombé dans le soir
Et la lune noyée
Dans l'aube
Se sont rencontrés au fin fond
Du fond de la mer

Coquillage Lune-Soleil
Rouge et jaune pâle
Recueilli un jour
Par un pêcheur

Lever de lune

Chut ! Chut !
Silence !
La voilà ! Elle se lève !

La crête
Des montagnes
Faiblement s'éclaire

Au fond
Du ciel
Comme au fond de la mer

Une vague
Clarté
Se dissout !

Les Étoiles et les Pissenlits

Au plus profond du ciel bleu
Comme des cailloux tout au fond de la mer
Noyées jusqu'à ce que la nuit vienne
Les étoiles dans le ciel diurne nous restent invisibles
Elles sont invisibles mais pourtant elles existent
Des choses qu'on ne peut voir bel et bien existent

Les pissenlits sont tombés fanés
Et dans les fentes des toits, silencieuses,
Enfouies jusqu'à ce que le printemps revienne,
Leurs fortes racines nous restent invisibles
Elles sont invisibles mais pourtant elles existent
Des choses qu'on ne peut voir bel et bien existent

Mystère

Pour moi c'est chose bien mystérieuse
Que la pluie qui tombe des nuages noirs
Étincelle d'argent

Pour moi c'est chose bien mystérieuse
Que les vers à soie mangeant les feuilles vertes du mûrier
Deviennent tout blancs

Et je voudrais tant comprendre
Pourquoi sans que personne s'en occupe les belles de nuit
D'un coup s'ouvrent toutes seules

Je voudrais tant comprendre
Pourquoi à mes questions tout le monde en riant répond
« Que veux-tu, c'est comme ça »

La Neige

La neige qui tombe sur la mer devient mer
La neige qui tombe sur la ville devient boue
La neige qui tombe sur la montagne reste neige

La neige qui est encore dans le ciel,
Que va-t-elle aimer devenir ?

En mémoire des baleines défuntes

C'est à la fin du printemps qu'a lieu la cérémonie en mémoire des baleines
Au moment où l'on pêche les poissons volants

Quand le son de la cloche du temple du rivage
Passe en vibrant sur la surface de l'eau

Quand les pêcheurs vêtus de leurs plus beaux habits
Se pressent vers le temple du rivage

Au large un jeune baleineau
Au son de cette cloche

Pleure ses parents morts
Les pleure de mille et mille regrets

Mais le son de la cloche à la surface de la mer
Jusqu'où ira-t-il résonner ?

La Chasse à la baleine

C'était par les nuits où gronde la mer
Les nuits d'hiver
J'écoutais les crépitements
Des châtaignes grillées

Autrefois bien autrefois des chasses à la baleine
Avaient lieu ici sur cette mer, dans la baie de Shizu ga ura
« La Baie Violacée »

La mer, une mer démontée, la saison, l'hiver
Et ce qui tourbillonnait follement dans le vent, c'étaient de gros flocons
La corde du harpon s'entremêlait à la neige

Les rochers, les galets, tout était violet
Même l'eau en permanence était violette
Et jusqu'au rivage de la baie qui s'ensanglantait, dit-on

Vêtus de plusieurs couches de leurs surtouts ouatés,
Debout en vigie sur la proue
Dès que la baleine s'affaiblissait
Ils se dévêtaient d'un coup et complètement nus

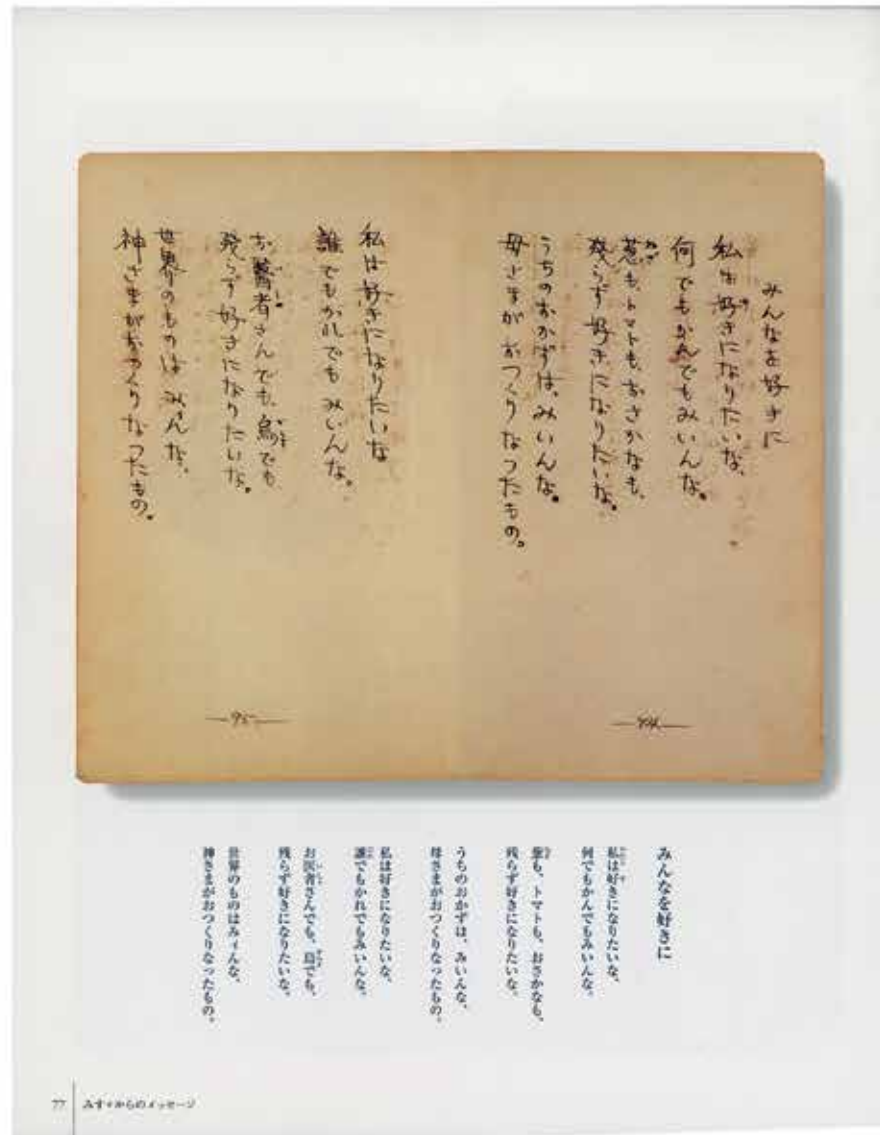
Se précipitaient dans la furie des vagues.
Oh ces pêcheurs de jadis, de jadis...
À l'entendre cette histoire
Me fait battre le cœur

De nos jours les baleines ne s'approchent plus d'ici
Et notre baie est devenue très pauvre

La mer gronde
Par les nuits d'hiver
Lorsque l'histoire s'achève
Et que l'on y prend garde...

Sommaire des poèmes

ぬかるみ	62 – 159	La Boue
角の乾物屋の	70 – 159	Là où il y a de la lumière
まち	22 – 160	Le Marchand de légumes et de pois secs
はっ秋	30 – 160	La Ville
八百屋の鳩	32 – 161	Début d'automne
おさかな	26 – 161	Les Pigeons et le Marchand de légumes
にわとり	102 – 162	Les Poissons
みんなを好きに	82 – 162	La Poule
犬	14 – 163	Aimer
口真似	58 – 163	Le Ramasseur de chutes de bois
木屑ひろい	76 – 164	Mimétisme
蜂と神さま	36 – 154	L'Abeille et les Dieux
木	52 – 165	L'Arbre
繭とお墓	140 – 165	Le Cocon et la Tombe
明るい方へ	110 – 166	Les Lotus et les Poussins
蓮と鶏	38 – 166	Le Temple shintoïste Gion
祇園社	106 – 167	Pêche miraculeuse
洋灯	42 – 167	La Lampe
しもやけ	54 – 168	Gerçures
見えないもの	144 – 168	L'Invisible
王子山	98 – 169	Le mont Ōjiyama "Montagne du Prince"
夢と現	44 – 169	Après la fête
お祭すぎ	86 – 170	Rêve et Réalité
つくる	66 – 170	Faire
墓たち	18 – 171	Le Chien
魚市場	134 – 171	Les Tombes
海の色	128 – 172	Marché aux poissons
小さなお墓	74 – 172	Une toute petite tombe
浜の石	138 – 173	Les Couleurs de la mer
海とかもめ	132 – 173	Les Galets du rivage
海の果て	92 – 174	La Mer et les Mouettes
空の色	116 – 174	Au bout de la mer
月日貝	96 – 175	Les Couleurs du ciel
月の出	114 – 175	Le Coquillage "Lune-Soleil"
星とたんぼぼ	122 – 176	Lever de lune
不思議	80 – 176	Les Étoiles et les Pissenlits
鯨法会	88 – 177	Mystère
雪に	120 – 177	La Neige
大漁	48 – 178	En mémoire des baleines défuntes
鯨捕り	126 – 179	La Chasse à la baleine



Setsuo Yazaki, *Dōyō-shijin, Kaneko Misuzu : inochi to kokoro no uchū*, Jula, Tokyo, 2011, p. 77 : carnet de Misuzu Kako, le poème *Aimer* (p.14 de ce livre).

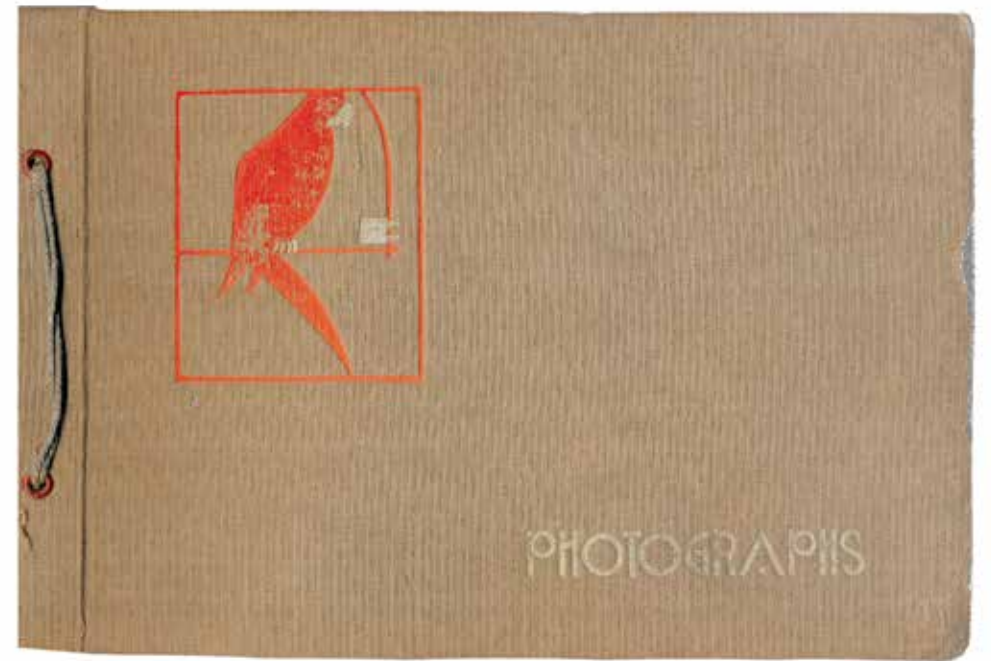




日	未嘗此業也	華月淨性	西岸受樂	一嘗鯨池	春幾言了志	日	専子米心	西岩養鯨念	宝養道教	念燦大魚
天	大保三辰三月 紫川浦	文政壬子	文政壬午 二月十四日	文政三年 二月十四日	文政三年 二月十四日	文政八年 二月	文政八年 二月	文政八年 二月	文政十二年 二月	同永物
							早川			同後

Documents appartenant au musée de la baleine de Kayoi :
 - Représentation et photographies XIX^e de la pêche à la baleine ;
 - Tombe des foetus des baleines gravides ;
 - Registre des baleines.

Album de photographies de la famille Takahashi



pages suivantes :
Cousins proches et éloignés
Shōnosuké Kaneko, père de Misuzu
Misuzu et son jeune frère Masasuké
Misuzu jeune fille
La tante de Misuzu, son mari Matsuzō Ueyama,
et Masasuké qu'ils ont adopté
Le dernier portrait de Misuzu



Biographie de Misuzu Kaneko

1903

Misuzu Kaneko, de son vrai nom Teru Kaneko, naît le 11 avril à Senzaki-mura, un port de pêche sur la mer du Japon près de Nagato, dans la préfecture de Yamaguchi. Son père, Shōnosuké Kaneko, est employé chez son beau-frère, Matsuzō Ueyama, qui possède une importante librairie à Shimonoseki, ville située à la pointe sud de Honshu, face à la Chine. Sa mère, Michi Kaneko, élève un fils aîné, Kensuké, âgé de deux ans.

1905

Le père de Misuzu est envoyé en Chine pour y diriger une succursale de la librairie. La mère de Misuzu donne naissance à un deuxième garçon, Masasuké.

1906

Le père de Misuzu meurt en Chine, le 10 février. Pour venir en aide à sa belle-sœur devenue veuve, Matsuzō Ueyama lui donne en gérance une librairie dans la petite ville de Senzaki. Michi Kaneko s'y installe avec ses trois enfants et sa mère.

1907

Matsuzō Ueyama et sa femme n'ont pas eu d'enfant. Matsuzō demande à Michi d'adopter son dernier-né pour qu'il lui succède. Le couple élève l'enfant sans lui révéler ses origines. Masasuké croira toute son enfance que Michi Kaneko est sa tante et Misuzu sa cousine. Misuzu, elle, connaît la vérité.

1910

Misuzu entre à l'école primaire.

1914

Le frère aîné de Misuzu quitte l'école primaire et travaille à la librairie de Senzaki, où il aide sa mère.



1916

Misuzu termine l'école primaire et entre au collège de filles.

1919

La femme de Matsuzō, sœur de Michi, meurt lors d'une importante épidémie de grippe espagnole. Michi l'avait recueillie quelque temps à Senzaki pour la soigner. Matsuzō, devenu veuf, demande à Michi de devenir sa femme. Celle-ci quitte Senzaki pour la grande ville de Shimonoseki, où elle vivra dans la librairie de son nouveau mari, se retrouvant alors la belle-mère de son propre fils... Misuzu reste à Senzaki en compagnie de sa grand-mère et de son frère aîné, qui prend la succession de sa mère à la librairie.

1920

Misuzu termine brillamment le collège. Son petit frère Masasuké vient souvent la voir. Ils partagent une passion pour la littérature. Masasuké veut organiser chez elle, dans la maison qui jouxte la librairie, un salon littéraire. Il ignore toujours qu'il est le frère de Misuzu. Il est amoureux d'elle.

1922

Le grand frère, Kensuké, se marie. Michi demande à son mari de faire venir Misuzu à Shimonoseki et de lui trouver un emploi.

1923

Matsuzō accède à la demande de la mère de Misuzu. Il donne à celle-ci, en échange du toit et de la nourriture, la responsabilité d'une petite librairie qu'il a ouverte dans un passage commercial. La jeune Teru commence à écrire de nombreux poèmes sous le nom de plume de Misuzu, un mot qui évoque la beauté du son des clochettes sacrées. Elle découvre les revues spécialisées dans la littérature pour enfants, très en vogue à cette époque. Une particulièrement, *Akai Tori* ("L'oiseau rouge"), est très connue. Misuzu y envoie ses poèmes. Celui qui est intitulé "Les poissons" est publié dans le numéro de septembre. Quatre-vingts autres de ses poèmes seront publiés dans diverses revues.



1925

Masasuké passe le conseil de révision pour la conscription et il apprend qu'il est un enfant adopté. Il veut savoir la vérité de la bouche de Misuzu : est-elle donc sa sœur ? Pour briser la relation affective entre Masasuké et Misuzu, son beau-père Matsuzō décide de la marier au vendeur qu'il vient d'embaucher, Miyamoto.

1926

Janvier : Masasuké tente de s'opposer à ce mariage. Misuzu termine deux recueils de poèmes : *Utsukushii machi* ("Une belle ville") et *Sora no kâsama* ("Le Ciel de ma maman"). Elle en écrira un troisième, *Samishii ôjo* ("La princesse esseulée").

Février : Misuzu épouse Miyamoto. Ils vivent au premier étage de la maison de Matsuzō.

Avril : Masasuké quitte la maison et va s'installer à Tokyo. Miyamoto décide lui aussi de quitter la maison pour s'installer seul avec Misuzu dans un autre quartier de la ville.

Novembre : Misuzu donne le jour à une fille, Fusaé.

1927

Pendant l'été, Misuzu rencontre le célèbre poète Yaso Saijō. Celui-ci la fera figurer dans l'anthologie des plus beaux poèmes du Japon qu'il est en train de composer.

Novembre : Miyamoto s'installe à son compte ; il ouvre un magasin de produits d'alimentation et de jouets. Misuzu est atteinte de syphilis, contaminée par son mari qui fréquente assidûment les maisons de plaisir.

1928

Son mari interdit à Misuzu de publier ou d'écrire de nouveaux poèmes. Il lui interdit également de correspondre avec d'autres poètes.

1929

Miyamoto décide de déménager pour la quatrième fois dans la ville de Shimonoseki. La maladie de Misuzu s'aggrave. Elle offre à Yaso Saijō ses trois derniers carnets de poèmes, qu'elle a auparavant recopiés pour les confier aussi à Masasuké.



1930

Février : Misuzu, de plus en plus malade et n'ayant plus la force d'élever seule son enfant, part s'installer chez sa mère. Elle parvient à divorcer de Miyamoto mais il obtient le droit de garde de leur fille.

9 mars : Misuzu se fait faire son portrait chez un photographe établi au pied du grand temple shintoïste de Shimonoseki.

10 mars : elle se suicide dans la maison de sa mère en prenant des somnifères. Auparavant, elle aura déposé près d'elle le ticket qui permet de retirer le cliché chez le photographe et une lettre dans laquelle elle énonce sa dernière volonté : que sa fille Fusaé soit élevée par sa mère.

1982

Le professeur Setsuo Yazaki découvre les trois carnets de Misuzu que Masasuké conservait depuis plus de cinquante ans. Il entreprend la publication de ses œuvres complètes, travaille à une biographie de la poétesse et fait paraître de nombreux petits recueils de ses poèmes, qui sont très diffusés au Japon. Il crée un musée Misuzu Kaneko dans l'ancienne librairie de Senzaki.



Journal de voyage

Jacqueline Salmon

21 octobre 2014

Nous sommes arrivées, Megumi, Liliane, qui nous accompagne, et moi, à l'aéroport de Fukuoka à la nuit. Après avoir dormi serrées toutes les trois dans une chambre du Hakata Green Hotel et avalé un repas dans le sous-sol de la gare, nous avons pris l'ultrarapide Shinkansen jusqu'à Asa, puis, sur la ligne de Mine, un petit train de montagne pour arriver en fin d'après-midi à Nagato. Tomoko, la belle-sœur de Megumi, nous attendait à la gare.

On a diné rapidement de sushis puis pris la route en direction du temple Kōganji à Shiraki. C'est le temple de la famille de Megumi, où nous sommes invitées par son frère, Zenjō Kamo, qui en est actuellement le supérieur. Bien qu'il fasse nuit, on devine un superbe paysage de mer et de montagnes douces.

Après avoir déposé nos chaussures dans un des casiers du *getabako* et enfilé des chaussons, nous franchissons une marche et nous entrons dans la partie du temple réservée aux réceptions privées, qui est attenante à la grande salle centrale du temple et à la maison d'habitation de la famille.

Tomoko, l'épouse de Zenjō, nous conduit à notre pièce par de longs couloirs étroits avec, d'un côté, les cloisons de papier de riz, de l'autre, une passerelle de bois qui longe un jardin tel qu'on l'imagine. Le *shōji* glisse et voilà la pièce dans laquelle nous allons dérouler les futons pour la nuit. Au fond, une longue estrade, le *tokonoma*, avec un bouquet, et le *kakejiku* portant une calligraphie : "Le mois de la lune longue", choisie pour cette période de l'année. Un peu plus loin, une estampe représente le fondateur du temple. Une fois les futons, les couettes et les petits oreillers de graines de sarrasin installés, Megumi demande à son frère si nous pouvons participer à la prière du soir. Nous sommes quatre dans la vaste salle du sanctuaire, face à une statue d'or dont le visage apparaît derrière une frange de perles. Le mur est décoré de superbes fresques représentant des lotus sur un fond or et bleu. Zenjō psalmodie un sutra, Megumi tient serrées entre ses mains des baguettes d'encens, tout va très vite. Puis Tomoko nous propose le bain. On y va ensemble, toutes les trois. À côté d'une grande salle d'eau carrelée où l'on s'assoit sur un petit tabouret pour se laver soigneusement et se frotter avec un linge de nylon râpeux, il y a, derrière une cloison coulissante, une baignoire très profonde. L'eau sans cesse renouvelée est à une température constante de 40°, été comme hiver. On propose toujours un bain aux invités. Le corps en



page 14



page 42



page 98



page 52



page 132



page 76



page 50

sort aussi bien prêt à affronter le froid des pièces non chauffées que la chaleur de l'été. Maintenant rentrées dans la pièce qui nous a été dédiée pour le séjour, nous avons fait glisser la cloison du *fusuma* pour délimiter un coin salon, nous sommes assises sur de petits coussins carrés et plats posés au sol, les *zabuton*, avec les pieds sous la table chauffante couverte d'un épais tapis molletonné. C'est le *kotatsu*, autour duquel on peut passer la soirée. C'est là que j'écrirai mon journal.

22 octobre

Liliane et moi décidons de faire un tour et d'aller au village le plus proche. Megumi n'en a aucune envie, elle dit qu'elle n'y est jamais allée : il n'y a rien à voir. Comme toujours, ce rien m'intéresse beaucoup. À deux kilomètres du temple, en descendant la route bordée de potagers minuscules, sages parfois mais le plus souvent désordonnés, on arrive à Kuzu, un village de pêcheurs, avec un tout petit temple shintō peu entretenu. Je regarde les espaces à demi abandonnés, de vieux filets amassés devant des hangars, les maisons simples, souvent pauvres, des fidèles attachés au temple de Zenjō. Au port, les bateaux avec leurs lamparos – ici la pêche se fait de nuit – disent avec éloquence la modestie des pêcheurs. Personne. Aucun magasin, aucun café ni restaurant.

En prenant un escalier on découvre notre premier *Jizō*, petite statue de pierre à bonnet rouge tricoté et à bavoir. On ne sait pas encore que ce petit Bouddha est le protecteur des voyageurs et des enfants décédés trop tôt. Plus haut, un vieux cimetière Edo avec ses tombes de pierre rondes. Encore plus haut, un petit temple bouddhiste dont la porte est ouverte sur un autel éclairé faiblement. De là on aperçoit un quartier mieux entretenu, des groupes de maisons dont les multiples toits de tuiles argentées au soleil semblent s'enchevêtrer.

On voit de petits arbres soigneusement taillés dans les jardins. Seule concession au monde de la consommation, les distributeurs de boissons : sodas, eau, thé ou café chaud en cannette.

Nous descendons voir les maisons de plus près, puis nous remontons au temple, et j'ai déjà une moisson de photographies. Je sais que je vais trouver ce que je cherche.

Megumi nous apprend maintenant les usages de la vie au temple. Les chaussons que nous avons enfilés en entrant ne nous serviront que sur les sols de bois du grand salon, où nous pourrions déjeuner, et dans les couloirs. Il faudra les quitter pour des savates de plastique, qui attendent en contrebas, sur le sol de ciment de la grande cuisine dédiée aux repas de cérémonie mise à notre disposition. Il faudra de nouveau les quitter et en enfiler d'autres devant les toilettes, et d'autres encore à la porte de la salle de bain. Nous devons les poser devant les pièces à tatamis où nous dormons et où l'on marche pieds nus, et enfin devant la grande salle du sanctuaire où d'autres encore seront à notre disposition. Aucune entorse ne sera possible.

Chaque jour, nous plierons notre futon le matin, nous le rangerons dans un angle de la pièce, nous préparerons notre propre repas et ferons notre vaisselle dans la cuisine des cérémonies. Nous prendrons nos repas dans le grand salon semi privé où est la télévision, sur des chaises et devant une table.

Pour les soirées, Zenjō a préparé de nombreux DVD : différents films racontant la vie de Misuzu. On a regardé le premier et j'ai noté les lieux où je veux aller.

L'été va continuer ici au moins une semaine encore. Mais le soir il fait très froid et on ne pourrait plus se passer du bain à 40° qui réchauffe le corps pour longtemps.

L'après-midi, nous avons exploré les alentours du temple.

23 octobre

Ce matin, le frère de Tomoko, Sachihito Miyake, est venu nous prendre pour nous conduire sur l'île Omishima, que nous avons vue en film hier soir et dont les paysages illustrent abondamment les livres de poèmes de Misuzu.

Nous passons par le port de Sensaki, espérant y déjeuner et trouver un marché aux poissons. Curieusement, je ne me résous pas à faire la photographie qu'il faudra bien pourtant que je rapporte pour accompagner ses poèmes les plus connus. On ne voit pas de poisson, juste des préparations, des surimis frais de toutes sortes, en rouleau dans des feuilles de papier fin joliment imprimées, des algues séchées et ligotées, des sacs de petits poissons secs. On peut aussi acheter une crème d'oursins frais marinés dans le saké. Mais le plus beau, dans la vitrine d'un restaurant qui nous attire, ce sont les imitations des plats en cire peinte et vernie. On entre, les tables basses sont installées sur une estrade entourée de *zabuton* sur



page 82



page 70



page 78



page 80



page 88

lesquels nous allons nous assoir sur les talons. On nous présente un menu où les plats sont photographiés. On choisit d'après une image. Et on choisit la qualité du thon : la chair du ventre, considérée comme ayant plus de goût, est plus chère que celle du dos. On est servies dans des boîtes ou des bols de laque. C'est délicieux, mais tout le monde ici mange très vite, sans parler, et se lève sitôt la dernière bouchée avalée.

Nous reprenons la route avec un arrêt à l'emplacement même où Misuzu Kaneko a écrit son poème "Le mont Ōjijama" en regardant sa ville de Sensaki – nous l'apprenons d'abord par le dépliant touristique trouvé au restaurant, puis sur place, par le panneau de signalisation ! Je fais la photographie... depuis le point de vue qui est signalé. Puis on part à pied pour le tour de l'île. Quelques points de vue surplombant la mer me proposent des images intéressantes, puis c'est la route du retour.

On voit dans la campagne de très belles et grandes maisons à toits de tuiles vernissées, à fenêtres doublées de papier de riz et de volets de bois sombre à lamelles verticales.

Les constructions sont complexes, avec de multiples pavillons encastrés les uns dans les autres, identiques à ceux que l'on voit sur les estampes anciennes.

Nous avons fait les courses à Nagato, dans un supermarché. On y a acheté des cadeaux, car il faudra en offrir beaucoup, mais inutile, paraît-il, de choisir ou de s'inquiéter des goûts de la personne qui les recevra, car il est d'usage de ne pas les ouvrir. On choisit un format parmi les boîtes joliment emballées. C'est ce qui compte. On flâne au rayon de la nourriture. Megumi est étonnée de me voir acheter des pâtes, des légumes et des fruits. Je suis la seule à avoir envie de faire la cuisine et de partager mes plats.

De retour au temple en fin d'après-midi, c'est nous qui, à la demande de Zenjō, avons sonné les dix coups du rituel de la fin du jour. Huit coups espacés de la durée de l'onde sonore, puis deux coups rapprochés. Tous les jours à dix-sept heures, il faut manœuvrer le lourd madrier horizontal suspendu qui vient heurter l'énorme cloche de bronze.

Les fidèles déposent chaque jour des offrandes : bols, linge de maison, thé, poissons, gâteaux, parfois emballés dans un carré de tissu noué. Les dons sont déposés devant l'autel avant d'être utilisés ou consommés, comme ont été déposés les cadeaux que j'ai apportés et dont je ne sais pas s'ils ont été ouverts ni s'ils ont fait plaisir. Des plateaux repas sont aussi déposés. Ils sont composés de petits bols et coupelles variées avec un poisson frit, un poisson cru, du riz blanc, une soupe miso, un bout de courge verte avec sa peau, plus rarement une petite prune ou deux grains de raisin.



page 96



page 90

24 octobre

Le vent souffle et le ciel est très nuageux, juste comme j'aime ! On s'est levées à 4h du matin pour assister au retour des pêcheurs. L'un d'entre eux, resté au village, avait accepté d'être notre intermédiaire. On lui a apporté des cadeaux, du café, des gâteaux, du thé de sarrasin grillé... Le jour n'était pas encore levé lorsque les bateaux, un d'abord, puis deux autres, sont rentrés lentement dans le petit port de Kubara. La scène que j'espérais était là. Mais je dérangeais, car soudain les hommes allaient très vite, à la lumière d'une torche ils renversaient des paniers et transportaient des caisses de sardines. Il faisait nuit noire. J'ai rapidement fait une photographie dont je savais que je ne l'utiliserais pas.

Puis j'ai attendu les couleurs du lever du jour. Mon appareil rangé, on nous a offert un poisson que nous avons rapporté au temple. J'ai dû le vider et le découper tout de suite à l'extérieur, sur le grand évier de pierre réservé à cet usage, avant de rentrer et avant même de prendre un petit déjeuner, parce que le poisson ne se conserve pas, croit-on ici, avec ses "tripes" à l'intérieur et qu'il est impossible de le couper dans la cuisine du couvent.

L'après-midi, retour à Senzaki. C'est à une trentaine de kilomètres. Cette fois-ci je veux voir la ville. Misuzu est partout ! On trouve son portrait dans des mises en scènes variées. Des panneaux avec ses poèmes sont installés sur tous les lieux qu'elle a regardés et dont elle s'est inspirée. Dans la rue qui mène au musée, mieux aménagée que les autres, les façades des maisons sont décorées de petites installations présentant chaque fois un poème. Nous allons sur sa tombe où sont quotidiennement déposées des offrandes : sodas, biscuits, tasses de thé vert. Sur une tombe voisine, je vois des cigarettes.

Monsieur Setsuo Yazaki, le découvreur de Misuzu en 1982, a transformé en musée la librairie où elle a vécu et travaillé jusqu'à l'âge de vingt ans. Dans la rue qui porte aujourd'hui son nom, nous croisons des files de petits écoliers en uniforme, revêtus de gilets jaunes, qui en reviennent. On entre par la librairie, puis on découvre la maison, la chambre de Misuzu, son bureau, la cour, la cuisine. Les photographies sont interdites, dommage... Mais peut-être pas, car ces lieux soigneusement rangés et astiqués ne transmettent aucune émotion. Le musée se prolonge dans la maison voisine, où une salle bien aménagée présente dans des vitrines les trois carnets de la poétesse et les diverses revues et publications de l'époque.



page 104



page 102



page 100





page 28



page 32



page 40



page 30



page 18



page 24

Je suis impressionnée par l'élégance inventive des typographies qui témoignent du haut niveau de culture de ceux qui les ont dessinés.

Le gardien, nous voyant attentives, nous propose la visite d'une sorte de mémorial décoré de myriades de dessins d'enfants des écoles, sur lesquels se déroule une scénographie de lumières inspirée de son poème le plus connu : "La grande pêche".

Nous nous promenons dans les rues où, semble-t-il, rien n'a changé depuis le début du vingtième siècle, sinon l'installation de l'électricité, avec ses poteaux plantés dans le sol et ses épaisses toiles d'araignées rayant le ciel. Les maisons sont basses, souvent avec une sorte de commerce imprécis au rez-de-chaussée. Des volets de bois sombre, en lattes serrées et verticales ou des stores de bambou suspendus devant les fenêtres occultent en partie la lumière.

Je cherche "Le marchand de légumes et de pois secs" du poème et je finis par le trouver.





page 16



page 12



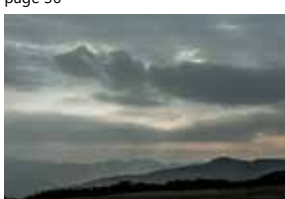
page 68



page 44



page 36



page 110

25 octobre

Noriko Kamo est la supérieure du temple bouddhiste de Furuichi, où le père de Megumi a officié après avoir donné la succession du grand temple où nous habitons à son fils. C'est une vieille dame merveilleuse, docteur en théologie. Elle a été l'élève puis l'épouse du père de Megumi. Pianiste passionnée, elle a carrément installé un piano à queue dans le *moya* ! Entre la statue d'Amida et une photographie de son mari décédé, elle joue Bach, beaucoup et merveilleusement bien. Les fidèles apprécient, d'ailleurs elle leur a installé des canapés...

Nous sommes allées aujourd'hui lui rendre visite. Moment délicieux où, après une courte prière et avoir déposé chacune une pincée d'encens dans le brûle-parfum central, nous avons fait, dans le *moya* même, des exercices pour arriver à tenir assises longtemps à la japonaise : exercices de yoga, de marche sur la jonction de deux tatamis en restant deux secondes sur chaque pied sans perdre l'équilibre. Ce n'est pas si facile ! On a beaucoup ri. Noriko m'a fait don de petits bols à thé cylindriques de Hagi – la plus belle céramique de la région, un peu rosée – sans doute offerts au temple par des fidèles. Elle m'a aussi donné un foulard paysan traditionnel en coton imprimé de motifs bleus. Pour faire le ménage, il est noué sur les cheveux ; il peut aussi réchauffer le cou comme chez nous ; ou bien on le roule en bandeau autour du front pour contenir la sueur – ce sont plutôt les garçons qui le portent de cette manière. C'est ici un accessoire indispensable à la vie quotidienne. Kinuko Hirakawa, l'amie de Noriko et de Megumi, était là. Elle est devenue aussitôt ma meilleure assistante, imaginant les détails qui m'intéresseraient, comprenant vite qu'il fallait tamiser la lumière du jour plutôt que la faire entrer un peu plus en faisant glisser les panneaux de lattes de bois. Nous sommes allées dans la chambre, envahie par un *butsudan*, petit autel bouddhiste encombré d'objets, de photographies et d'offrandes : eau, fruits, biscuits... Comme au temple de Zenjō, il faut descendre d'une marche pour entrer dans la cuisine. Une marche de bois sur laquelle sont posés les chaussons de Noriko. J'ai photographié le grand évier de pierre et l'entrée du four où se chauffe au bois l'eau du bain : le *furo* rond, recouvert d'un couvercle de bois, dans lequel il faut se tenir recroquevillé. Tout est là, tel que dans le musée de Senzaki mais cette fois dans la vraie vie !

Kinuko vénère Misuzu Kaneko. Elle connaît les films racontant la vie de la poétesse. Elle a eu l'idée de nous emmener voir, depuis un chemin en surplomb, une petite plage au fond d'une crique où plusieurs scènes de film ont été tournées. Et aussi un très ancien temple shintō, que nous avons photographié. En fin de soirée, nous sommes allées prendre un bain dans son *onsen* préféré, à la montagne. Nues et soigneusement lavées, on se glisse dans l'eau chaude au milieu des roches dans un magnifique paysage, en regardant le jour qui tombe. Il y a des femmes de tous les âges, beaucoup de femmes très vieilles mais aussi des enfants. De nos jours, les hommes et les femmes se baignent séparément. Au milieu de tous ces corps jeunes et élégants, décharnés ou déformés, qui se comportent avec la simple évidence de l'endroit, je me suis sentie simplement bien, enrichie d'une expérience impossible chez nous. Puis on a diné sur place.



26 octobre

Chaque matin, un grand coup de gong ouvre la journée à sept heures. On se lève aussitôt. On plie les futons ou, s'il fait beau, on les met au soleil sur la balustrade de la cour de bois qui longe les pièces à tatamis. Puis chacune prépare son repas du matin et, comme pour tous ceux de la journée, ne se soucie pas de le partager. Je relis les phrases de remerciement que j'ai préparées dans mon japonais de débutante. Aujourd'hui, c'est jour de ménage, les fidèles seront nombreux. Ils savent que je vais présenter mon projet sur Misuzu Kaneko. Tomoko a décoré de bouquets la grande salle centrale, le *moya*. On est tous rassemblés pour un court office. Face à la statue d'or, dont je sais maintenant que c'est celle d'Amida, Zenjō psalmodie un court sutra. Les fidèles serrent leur chapelet entre leurs mains jointes. De temps en temps, un coup de gong, puis chacun va déposer une pièce et prendre un peu d'encens dans une boîte de laque pour le déposer dans l'énorme brûle-parfum de bronze.

Il y a une quarantaine de personnes, la plupart très âgées, presque autant d'hommes que de femmes. Zenjō me présente, il explique que je suis venue pour faire en France un livre sur les poèmes de Misuzu Kaneko. Les têtes hochent lentement en signe d'adhésion... Tous connaissent et aiment Misuzu Kaneko depuis l'enfance. Ce sont les donations des pêcheurs et des paysans qui font vivre le temple, je suis aussi leur invitée, ils le savent et m'accueillent avec gentillesse. Zenjō a imprimé des poèmes et les a distribués. Tous ici pensent que Misuzu était bouddhiste, de cette école particulière au Japon qui vénère Amida. Amida est la version japonaise du Bouddha Amitabha, qui donne aussi aux plus humbles l'espoir d'être conduits après leur mort au "pays de la Terre Pure".

Un couple plus jeune m'invite dans sa maison, puis tout le monde s'éparpille. Les femmes avec des torchons, des balais, des sceaux, les hommes avec des piochons, des râpeaux, des cisailles. Certaines dames âgées, qui vacillent sur leurs jambes arquées ou qui ont le dos cassé, participent avec sérieux. On se repose parfois, assis par terre dans le jardin ou sur le plancher de l'*engawa*, sorte de terrasse étroite protégée par l'avant-toit. Pendant ce temps, la grande cuisine du temple résonne de bavardages et de rires. C'est la préparation du repas. J'ai proposé un plat français : une ratatouille de légumes confits façon nouvelle cuisine. Pour la première fois, je prépare un plat pour quarante personnes. On m'a proposé un wok incroyable, fixé au sol sur un pied en fonte et qui se manœuvre avec un volant. Le repas est servi autour d'une table en U ; chacun a son plateau, où sont disposés de nombreux petits et très petits bols de porcelaine et de laque. Zenjō récite une courte prière, puis à son discours succède celui du chef de l'assemblée des fidèles.

À la fin du repas, on distribue des sacs et chacun ramènera ce qu'il n'a pas mangé. Une conversation sérieuse s'engage sur les réparations et aménagements à prévoir pour le temple. Je découvre dans la pièce un panier de bambou calciné qui m'intrigue : c'est pour purifier l'air.

27 octobre

J'ai appris qu'il y avait un village voisin où les femmes étaient des *ama* (littéralement : "femmes de la mer"). C'est par un article du Monde que j'avais appris l'existence de ces femmes, parfois très âgées, qui ont acquis une technique de plongée en apnée qui est unique. Elles vont décrocher ici les oursins, ailleurs les éponges, les huîtres perlières. Ma curiosité était vive, mais Megumi, hostile, imaginait ce village comme un bidonville. Par contre Zenjō, pas du tout choqué, a tout de suite accepté. Il n'était pas sans relations dans le village et cela m'a impressionnée car, ces communautés n'étant pas fréquentables pour la société japonaise, l'attitude de Zenjō montrait qu'il appliquait dans la vie réelle ce "bouddhisme de la Terre Pure" qui était enseigné au temple.

Contre toute idée préconçue, le village était en apparence plus riche que celui de Kuzu. Les *ama* gagnent aujourd'hui beaucoup d'argent. Comme nous étions accompagnées par Zenjō, qu'ils étaient fiers de recevoir, un couple âgé a accepté de nous faire une démonstration au port. L'homme est dans le bateau, sa femme enfile devant nous une combinaison de caoutchouc noir qui lui prend la tête ne laissant libres que la bouche et les yeux. "Terroriste !" dit-elle en riant. À la main elle a un crochet de métal, c'est son seul matériel. Ils tentent de nous dire un nom, et voilà que tout d'un coup je comprends : "Pierre Gagnaire". De la traduction approximative de Megumi, je retiens que c'est la deuxième fois que des français viennent à Ōura.





page 56



page 20



page 22



page 26



page 74



page 58

Pierre Gagnaire avait voulu voir qui étaient ces femmes qui pêchent les meilleurs oursins, avait-il dit, et ils avaient ensemble fait un barbecue sur la digue ! J'en ai curieusement ressenti une certaine fierté. L'après-midi nous avons répondu à l'invitation de Kyojirō et Kimiē Okutō, qui m'avaient proposé, au temple, de nous faire visiter leur maison. Ils ont acheté récemment la maison voisine de la leur, une très ancienne maison comme celles de leur enfance. Ils y ont installé leur musée : une collection de porcelaines et de faïences. Les plus anciennes datent du quinzième siècle. "Ce sont uniquement des objets que les gens ont jetés après un décès (...) dont je suis le seul à connaître la valeur", a dit Kyojirō. Il y avait des merveilles et il était heureux de montrer sa collection. Heureux que j'y prenne du plaisir. Le matin même, il avait pêché un *sawala* de plus d'un mètre. Ils ont voulu être photographiés avec, puis il nous a prélevé les filets que j'ai coupés le soir en sashimis.

28 octobre

Misuzu avait trois ans lorsqu'elle a perdu son père. Sa fille avait trois ans lorsqu'elle s'est suicidée. Je voulais voir et photographier des enfants. C'est Kinuko, toujours présente pour m'aider, qui a organisé les autorisations avec la crèche d'un village voisin. La route est belle. Même si la mer est proche, on est à la campagne. C'est la saison de la moisson. Les rizières sont petites, la production d'une famille, sans doute. On voit dans les champs de toutes petites meules de foin qu'on pourrait entourer de ses bras. Les maisons des paysans sont isolées. Leurs beaux toits de tuiles vernissées leur donnent de loin des allures aristocratiques. De près, c'est un bazar de cruches, de paniers oubliés. Autour de la maison, le riz coupé à la main sèche sur des portants de bambous, les poules courent, les petits potagers sont protégés par de vieux filets de pêche accrochés à des piquets. On aperçoit les *shōji* à travers les fenêtres de verre mince à panneaux glissants. Les *amado*, volets de lattes de bois sur glissières, protègent des intempéries et, toujours, faisant presque le tour de la maison, cette sorte de véranda au sol de bois, plus ou moins ouverte, l'*engawa*, encombrée de potiches parfois oubliées mais aussi, souvent, de paniers de légumes à vendre. Et toujours, sur les routes ou dans les potagers, on voit de très vieilles femmes au dos cassé avec leur pantalon de coton à motifs tissés en ikat, leur blouse à longues manches attachées derrière et leurs bonnets de coton froncé et à large corolle les protégeant du soleil. Les hommes, eux, sont probablement en mer. Nous ne voyons jamais quelque lieu qui ressemblerait à un bar mais partout des distributeurs automatiques de sodas, d'eau et de cannettes de thé chaud.

Les enfants ont été rassemblées devant la belle maison ancienne de Yuzan, une amie de Kinuko. Les petites étaient craquantes, joyeuses,



se tenant par la main en jouant, s'installant tour à tour dans un hamac suspendu sous l'avant-toit de l'*engawa*. L'une d'elle m'a offert une fleur de pissenlit.

Ken Horinouchi, un voisin, performeur et calligraphe venu de Tokyo pour s'installer à la campagne et y vivre en paysan, nous a permis de visiter sa très vieille ferme. Au milieu de la pièce à vivre, on fait la cuisine sur une grande table braser surmontée d'une crémaillère suspendue au plafond, à laquelle est accrochée une marmite de fonte. La baignoire, ronde et profonde, d'à peine un mètre de diamètre, est en fer galvanisé. Son couvercle de bois permet de garder la chaleur. Comme chez Noriko, l'eau est chauffée au bois dans un petit four au-dessus duquel elle est installée. Les fenêtres extérieures en papier de fibre de mûrier doublées d'un verre mince monté sur des châssis à glissières laissent entrer le froid. Elles donnent sur des couloirs de circulation autour des pièces à tatamis où l'on dort. Dans la journée, les futons sont repliés dans un coin. On accède à ces pièces surélevées par un petit escalier de bois après avoir quitté ses chaussons. Ces maisons sont belles et sombres, on y entre en écartant les deux panneaux de tissu du *noren*. Le sol est en terre battue. C'est l'espace du *genkan* où l'on quitte ses chaussures pour enfiler des chaussons.

En fin de journée, Kinuko nous emmène dans un restaurant de pâtes. Le meilleur ! Nous nous asseyons devant un comptoir ; on nous sert un grand bol de bouillon où flottent des lamelles de lard. Les pâtes sont au fond. Tout le monde fait beaucoup de bruit en aspirant les nouilles. C'est ce qu'il faut faire, cela signifie que c'est bon. La bouche grasse, je suis perplexe.

29 octobre

Ce matin, enfin, un peu de tranquillité. On a pu laver notre linge. On a mis rituellement les futons au soleil sur la barrière du temple, du côté du jardin intérieur. On a passé l'aspirateur sur les tatamis et préparé une pièce pour Masashi Ogura.

Masashi, qui depuis plusieurs années habite dans mon atelier lorsqu'il vient à Paris, parle français et s'intéresse particulièrement à mon voyage. Historien de l'art, il viendra me rendre visite demain pour m'expliquer le contexte culturel de l'époque de Misuzu et m'aider dans le protocole de politesses qu'il me faut maîtriser au Japon. Je vais prendre le bus pour aller le chercher à Nagato. Une heure de bus à travers les villages de pêcheurs... Je me fais une joie de cette heure enfin seule ! J'inviterai Masashi au restaurant pour lui expliquer mon projet. J'ai prévu de faire avec lui le voyage en bateau autour de l'île Omishima. Megumi nous rejoindra vers quinze heures, heure à laquelle on peut l'accompagner en voiture devant la gare.

30 octobre

J'étais partie en me sentant libre et légère, mais – erreur de traduction ou d'interprétation des horaires ? – je me suis retrouvée au terminus devant une gare à vingt kilomètres de Nagato. Le chauffeur m'avait déposée en me signifiant que c'était la gare de Nagato. En fait, c'était de là que j'aurais pu prendre un train pour Nagato ! Je m'en suis aperçue tout de suite mais sur l'horaire des trains il n'y avait rien, et personne derrière le guichet. Pas de bus non plus... J'étais très en avance, donc à demi inquiète. Je me suis baladée autour de la gare, au milieu de pas grand-chose. J'ai quand même trouvé un cadeau pour Megumi, dont ce sera l'anniversaire le quatre, et aussi une poste d'où envoyer quelques cartes postales. Puis, par chance, j'ai vu soudain un taxi. Je ne suis arrivée à Nagato que cinq minutes en retard. Masashi m'attendait sagement assis sur un banc. Je l'ai reconnu de dos à son allure. Vêtu de noir, fin, parfaitement droit. Dans cette gare, il ne ressemblait à personne. Nous avons cherché un restaurant et mangé une sorte de *pho*, puis, avant même que nous ayons pu prendre un café, le restaurateur nous a mis dehors parce qu'il fermait, et nous sommes retournés continuer la conversation assis sur le banc de la gare, n'ayant pas trouvé d'autre endroit où nous poser.



page 94



page 92



page 124



page 66



page 108

Ensuite, Megumi est arrivée en voiture et nous a accompagnés au départ des bateaux pour le tour de l'île Omishima. Le soleil était vif puis, très vite, le jour est tombé. C'est dans cette lumière éteinte et ce vaste paysage de la baie de Yaya, entourée des silhouettes de montagnes douces se découpant et se succédant dans un feuilleté de gris, que j'ai sans doute fait les deux photographies des pages de garde du livre. Retour au temple. Tandis que je prépare un repas pour Masashi, on m'enseigne toutes les subtilités que j'ignore : les couteaux pour les légumes ne doivent pas toucher le poisson. On ne peut pas utiliser les grands plats de service sans demander la permission, parce que, là encore, il y a ceux dédiés aux légumes et ceux qui peuvent recevoir du poisson. Poisson bien entendu tué et préparé à l'extérieur du temple.

31 octobre

Aujourd'hui : premier jour sans programme. Masashi est parti ce matin. Lessive et film TV sur Misuzu, c'est tout ! Mais en soirée... karaoké sur des chansons françaises, dans l'*ima*, cette sorte de salle de séjour où nous prenons nos repas. Je suis stupéfaite d'entendre en japonais les chansons d'Édith Piaf et de Jacques Brel chantées par cœur et en chœur par Zenjō, Tomoko et Sachihiro, leur micro à la main, face à un mur d'écrans, amplificateurs et baffles sophistiqués. J'apprends que Zenjō était ingénieur chez Sony avant de devoir faire ses études de théologie pour succéder à son père au temple Kōganji.

Toujours à la recherche de nouvelles idées pour mes photographies, Zenjō a découvert qu'un train à vapeur avait été remis en service pour le bonheur des touristes. On fait aussitôt un plan : un bus d'abord, puis quatre lignes de chemins de fer différentes, je ne sais combien de changements... Départ à 5h30 retour à 21h45 !

1^{er} novembre

Ce matin, la locomotive à vapeur, une antique C71 toute reluisante, nous attendait à la gare de Yamaguchi. Direction Tsuwano, où le projet touristique est d'aller cueillir des pommes. Dans le train, c'est la fête : les écoles, les familles, *bento* sur les genoux, appareils photos autour du cou, s'apprêtent à l'aventure. Je suis une curiosité photographiée encore et encore. À chaque arrêt, on me sollicite pour appuyer sur le bouton et enregistrer les familles au complet devant la locomotive. Tout le long de la ligne, des centaines de photographes attendent le passage du train, remontent dans leur voiture pour le récupérer un peu plus loin. On n'est pas descendues à la bonne gare et on s'est retrouvées en rase campagne à marcher le long d'une route en espérant trouver un restaurant. On a fini par trouver un bouiboui incroyable. J'ai adoré ce lieu, Megumi beaucoup moins ! Il y avait là une famille : la mère en kimono de soie rose, le père et les enfants dans des costumes très soignés, sans doute de retour d'un mariage ou d'une cérémonie. Mais il y avait aussi la TV, avec un combat de sumos, et un fatras de livres, revues, photographies, écrans avec des jeux vidéo à disposition. Un vrai lieu de vie. Lorsque la cuvette de bouillon est arrivée on était mortes de rire, ne sachant pas si c'était ou non pour se laver les mains ! Le réchaud est arrivé ensuite. On était bien sûr assises sur les talons et sur nos *zabuton*, comme il se doit. C'était finalement simple et bon. Pour finir, la patronne nous a offert des pâtes maison et, nous voyant perdues, a pris sa voiture pour nous conduire à la cueillette des pommes, où nous avons retrouvé les autres voyageurs. Au retour, les paysages décolorés par la tombée du jour défilaient, voilés de fumée, et je pensais à Misuzu. "Si la vie était rêve, et si le rêve était réalité..."



2 novembre

Ce matin nous devons aller à l'école Mukatsuku, une école primaire de Nagato. Les élèves ont bien sûr Misuzu Kaneko à leur programme, comme tous les enfants japonais. Zenjō a voulu qu'ils me rencontrent et que tous ensemble nous parlions des différences entre la France et le Japon. J'avais préparé une longue liste. Megumi traduisait, l'ambiance était au rire ! Ce soir, programme soleil couchant avec Zenjō au bout de la presqu'île Tawara, plein ouest, face à la pleine mer. Il a fait autant de photographies que moi mais avec de multiples objectifs et des zoom impressionnants !

Au retour nous nous arrêtons sur le côté nord, face à la mer du Japon. À la lumière du soir, la surface est métallisée. Du même point de vue, je multiplie les photographies tant l'instant est unique. Au retour on regarde un nouveau film sur la vie de Misuzu. Un peu différent des autres. Je repère les lieux où je ne serai pas allée.



page 138



page 118



page 140



page 128



page 126



page 112



3 novembre

Ce soir, nous rentrons de l'île Tsunoshima, très différente de l'île Omishima. Elle est vaguement aménagée pour le tourisme, avec une boutique souvenirs où je peux acheter des cartes postales, ce qui est très rare. Au sud, la mer est si peu profonde que les vagues se succèdent comme de longues langues. Au nord, au contraire, les vagues viennent s'échouer sur une frange de galets noirs. Cette fois-ci, j'ai une vraie variété de photographies de mer. Sur le retour, nous nous arrêtons pour la soirée dans un *onsen* de bord de mer et je complète ma récolte du jour avec un panorama de montagnes douces. Avec le soir qui tombe, une crête de nuages s'est accrochée aux montagnes qui nous entourent. Nous ne sommes que trois dans le bain chaud en extérieur, séparé de la mer par une légère barrière de roches. Quelques rares cris d'oiseaux... On entend le silence. Puis on dine sur place. J'observe, étonnée, ce qui se passe à une table voisine de la nôtre : un très grand calmars, juste sorti d'un aquarium, encore vivant, translucide et nacré, repose en majesté sur une planche de bois. On est en train de le découper en sashimis devant les convives attentionnés en reconstituant sa forme méticuleusement. On dit que la douceur de sa chair est intense... C'est aussi la meilleure saison pour le déguster. Les calmars de Sensaki, *Ika no joō*, sont la spécialité de la région. Pas un film sur Misuzu Kaneko sans une scène se situant à proximité d'un étendage de calmars en train de sécher.



page 130



page 134



page 122

4 novembre

J'ai voulu faire le voyage à Shimonoseki où Misuzu Kaneko a vécu, là où elle a tenu une petite librairie, là où on l'a mariée, là où elle a eu sa fille Fusaé, là où elle s'est suicidée. Nous avons pris la ligne ferroviaire principale, le San'in-Sen qu'elle avait plusieurs fois emprunté et qui longe la mer du Japon. Je regarde le paysage avec ses yeux. À notre arrivée, la ville nous apparaît banale et distendue, il n'y a pas grand-chose à voir sinon, partout et sous toutes les formes, depuis les plaques d'égoût jusqu'aux lanternes ou aux porteclés-souvenirs : des *fugu*. Ce poisson étrange à grosse tête ronde qui, contrairement aux autres, regarde de face avec de gros yeux globuleux, se gonfle et se couvre d'épines dès qu'il est en danger. Parce que le mot *fugu* signifie aussi "bonheur", il est devenu l'emblème de la ville. En cherchant bien, on trouve quand même une banque qui expose sa collection de bols à thé matcha. Je suis étonnée de les découvrir aussi grands. Pas très loin, une ancienne poste est transformée en musée. Les bâtiments sont identiques à ceux que l'on voit aux États-Unis à la fin du dix-neuvième siècle.

On y trouve le dépliant d'un parcours Misuzu Kaneko, que nous suivons sans émotion, car il nous fait aller de plaque commémorative en plaque commémorative. Nous allons dans le sanctuaire shintô où elle se rendait régulièrement, à deux pas de la boutique du photographe chez lequel elle avait fait faire son portrait la veille de son suicide. La boutique n'existe plus. En haut des marches du temple, un *shishi*, lion de pierre à bouche ouverte, placé à gauche de l'entrée, fait face à un *shishi* chien à bouche fermée. Venus de Chine puis de Corée vers le septième siècle, ils protègent l'entrée du temple. Je découvre un renard de pierre couvert d'un bonnet de laine, comme ceux qui gardent l'entrée du sanctuaire d'Inari. C'est une divinité très populaire associée au riz, à la prospérité et aux renards, qui sont ses messagers. L'allée de *torii* plonge jusqu'à la rue. Les petits nœuds de papier et autres plaquettes de bois suspendues avec leurs vœux... tout est là comme au temps de Misuzu, lorsqu'elle a dû venir tirer la corde pour faire tinter la cloche, prier et jeter une pièce. Ensuite, pour voir ce qu'elle a forcément vu, probablement remarqué, nous avons fait un pèlerinage sur les lieux où nous pensons qu'elle a habité. Nous avons regardé les pierres usées de l'escalier qu'elle a dû prendre, remarqué un mur de pierres rosées particulièrement agencées, levé le nez pour apercevoir une maison



page 86



page 34



page 14

modeste en surplomb. La sienne ? Probablement pas.

Un grand moment de la journée a été notre déjeuner dans un restaurant près du marché aux poissons. Les restaurants sont regroupés dans un immeuble de trois étages les uns à côté des autres. Il n'est pas facile de choisir, tous proposent à peu près la même chose. La spécialité de la ville est le *fugu*. Pour nous, c'est le poisson-lune. J'ai donc choisi un repas de poisson-lune sous toutes les versions : frit en tempura, grillé, cru en sashimi, en surimi, en bouillon... J'avais déjà choisi un autre menu pour le dîner mais le soir, bien que les courses au *combin*i soient toujours plus onéreuses qu'un repas au restaurant, nous y avons acheté deux ou trois choses pour les manger dans notre chambre. Pas envie de ressortir dans cette ville sinistre. Nous avons pris une petite chambre d'hôtel dans laquelle on a fait rajouter un futon et on a dormi toutes les trois une fois de plus serrées comme des sardines.



5 novembre

Heureusement, il y avait à l'hôtel un dépliant touristique sur les environs de Shimonoseki. Deux choses étaient tentantes : le plus ancien temple zen du Japon, et la résidence d'un puissant seigneur. J'ai eu du mal à emporter la décision, il allait falloir faire une demi-heure de bus et marcher beaucoup, alors que nous avions notre train à 16h... Bref, on y est allées en partant à 7h, après s'être arrêtées au marché aux poissons (le deuxième en importance après celui de Tokyo) pour voir l'ambiance. C'était déjà un peu trop tard mais tout de même intéressant. J'ai acheté un sachet d'huîtres que j'ai dégustées avec bonheur, assise sur une marche de bois devant la mer. Megumi était dégoûtée ! Puis nous avons fait les échoppes des vendeurs d'algues, surimis et poissons séchés ou transformés, voisinant avec de minces tranches de *fugu* disposées en éventail et sous blister, parfois décorées de quelques brins d'herbe en plastique vert. J'ai acheté des nageoires de *fugu*, qu'il faudra faire légèrement griller puis faire macérer dans du saké tiède, et des algues en petites pelotes nouées : de quoi faire un repas au retour en France, en ajoutant les tentacules de calmar fourrées au sésame noir. Puis le car, d'abord, et ensuite une assez longue marche le long d'une rivière. On a enfin découvert le Kinzan Kōzanji. Fondé en 1327 par Genjaku, il combine des caractéristiques propres aux architectures chinoises et japonaises. C'est au Japon le plus ancien bâtiment conçu dans le style zenshūyō. Le système de construction sophistiqué de la charpente est probablement le même que celui des bâtiments de la cité impériale de Pékin : conçu pour résister aux tremblements de terre. La toiture à deux étages est couverte d'une mousse qui semble venir de la nuit des temps. Avant même d'y entrer, je suis profondément émue. De l'ombre profonde de l'intérieur, une haute spiritualité se dégage. Au centre, dans l'ombre épaisse, la fascinante statue d'un Bouddha vieil or est une représentation de Kannon, émanation d'Amida, œuvrant de ses nombreux bras à aider toutes les créatures. Devant lui, sur toute la largeur du temple, une rangée de sculptures de terre magnifiques mais pour moi énigmatiques est installée sur une planche de bois. Sur le côté, dans la pénombre, la statue de Genjaku assis sur un fauteuil de bois nous force au silence.



page 84



page 40



page 54



page 38



page 114



page 116

Nous prenons à nouveau le bus pour aller visiter, à Chofu, la résidence et le jardin de Mototoshi Mori, le quatorzième chef du clan Mori. La résidence a été construite en 1903 et a été préservée. On y a reçu l'empereur. En marchant à pas feutrés sur les tatamis, devant le splendide jardin qui entre dans la maison par les larges baies ouvertes jusqu'au sol, devant les délicates peintures nacrées des *oshiire* (placards à portes coulissantes) éclairées par la lumière filtrant des *shōji*, c'est un art de vivre que nous ne connaissons pas qui transparaît. Un art de vivre dans une nature cultivée et dans des habitations légères, insoumises aux conditions du climat.

Le soir, de retour au temple, nous avons regardé un énième film sur Misuzu Kaneko. Trouvé l'invitation à déjeuner de Charles-Henri Brosseau, consul de France à Kyoto.

6 novembre

Le lendemain du retour de Shimonoseki, on avait décidé avec Liliane de ne rien faire, juste la cuisine, car on n'en pouvait plus des plateaux repas tout préparés et des *bento* qui sont la nourriture habituelle des Japonais. Tout finit par avoir le même goût de sauce au soja, avec des consistances plus ou moins molles ou visqueuses. Au temple, le riz cuit dans une machine spéciale qui le garde à bonne température, mais cela prend plus d'une demi-heure pour un résultat plus que moyen. Je me suis lancée dans la cuisine des poissons et des calmars frais, des nouilles de sarrasin aux légumes sautés et même des salades presque comme à la maison. On se sent mieux et Megumi et Tomoko commencent à apprécier ma cuisine. Soudain nous mangeons ensemble !

Pour la première fois, Zenjō est venu partager une salade de légumes que j'avais préparée – cela doit l'intriguer de me voir souvent dans la cuisine – et je sens qu'une sorte d'amitié pourrait naître si nous parvenions à communiquer seule à seul. C'est ce que le numérique a permis ! Alors que je regardais mes photographies, il est revenu pour me montrer des photographies de cérémonies au temple prises il y a une quinzaine d'années, mais qui pourraient aussi bien dater du dix-neuvième siècle. Les kimonos sont somptueux.

Il pleut enfin, et je vais probablement arriver à faire une photographie inspirée par le poème "La boue", celui qui m'a décidée à faire le livre et le voyage.

Hier soir, j'ai vu un nid de frelons rond comme un ballon suspendu au bord d'un toit.

Ce soir, je descendrai une dernière fois à Kuzu pour le lever de lune sur la mer.



page 60



page 64



page 136



page 120

9 novembre

Alors que je regardais encore mes photographies, Megumi et Tomoko sont arrivées en courant. Zenjō venait d'apprendre qu'il y avait à Nagato un spécialiste de la littérature régionale connaissant bien l'œuvre de Misuzu. Monsieur Fuminori Fujii voulait bien nous recevoir... tout de suite ! Prestement les choses se sont organisées : Zenjō et Noriko, qui habite à mi-distance, ont concocté un rendez-vous. Il nous a déposées à un croisement de route, elle a pris la relève, et trois-quarts d'heure après, on était au rendez-vous !

Rencontre inespérée : l'arrière-grand-mère de Fuminori Fujii était la sœur du père de Misuzu. Devant mon premier bol de thé matcha, suivi très vite d'un petit bol de thé vert, il m'a aussitôt proposé les photographies de l'album de famille pour illustrer la biographie de Misuzu Kaneko. Il avait été directeur du musée de la baleine de Kayoi, sur l'île Omishima. Il m'a donné des documents précieux, des photographies rares de la pêche à la baleine au dix-neuvième siècle et un livre de Tustomu Konno rassemblant les principaux poèmes de Misuzu dans une édition critique. Livre que nous avons épluché, avec Megumi, le soir même, et dans lequel j'ai fait un premier choix de poèmes. Demain, il nous accompagnera sur Omishima. On sait que Misuzu s'y rendait pour la fête annuelle des baleines mais aussi pour y visiter une cousine religieuse.



10 novembre

Curieuse des lieux que nous allions découvrir, Noriko nous a accompagnées. Nous sommes d'abord allées au musée de la baleine, puis au petit temple qui leur est dédié. Très proche, la pierre tombale des fœtus de baleine est dressée dans un minuscule cimetière imbriqué entre les maisons. Noriko a voulu voir aussi les tombes des prêtres successifs et nous sommes restées longtemps à errer dans un cimetière très ancien surplombant la mer. Partout des étendages de calmars en train de sécher. Puis, dans une riche maison du village de Kayoi, nous avons été reçus par Yoshikatsu Haykawa, chef de la dix-huitième génération de la pêcherie de baleines. Dans un moment émouvant, il a psalmodié pour nous le chant incantatoire des pêcheurs de baleine. Il fallait prier et se faire pardonner, car la chasse était cruelle. Les hommes y risquaient leur vie mais ils avaient conscience d'utiliser des méthodes indignes, car ils attrapaient les baleineaux afin que la mère ne s'éloigne pas et revienne les chercher. C'était le cinquième prêtre depuis la création du temple qui avait décidé de faire un tombeau pour les bébés qui n'étaient pas encore nés afin que leur âme aille au paradis. Il y aurait eu dans chaque village de pêcheurs environ deux mille huit-cents baleines chassées depuis la fin du dix-septième siècle, moment où l'on a commencé à les baptiser et à les enregistrer sur les tablettes des autels aux défunts. Fuminori Fujii nous a conduites au petit temple à entrée shintoïste et à autel bouddhiste où sont déposés les registres des noms bouddhistes qui leur ont été donnés. Aujourd'hui, on fréquente les sanctuaires shintoïstes et bouddhistes selon les fêtes et les moments de la vie, et à Kayoi, les baleines sont fêtées dans les deux temples. Près de l'ancien embarquement des bateaux, là où avant de partir les pêcheurs assemblés se réchauffaient, nus, autour d'un brasier, on nous a montré une chapelle où les pêcheurs viennent encore prier six *Jizōs* à bavoires fleuris avant de prendre la mer... Face au village, sur une toute petite île, un sanctuaire shintō, que l'on pourrait prendre pour un bateau, se découpe sur la mer. C'est là que se rendent encore aujourd'hui les barques de la procession de la fête traditionnelle des baleines. Puis nous sommes allées voir le couvent, seul, digne, face à la mer. Mais aujourd'hui les sobres bâtiments de bois sont fermés, un silence impressionnant s'est abattu sur les cloches de bronze. Les dernières religieuses sont parties, laissant des bibliothèques entières que personne ne désire sauver.



page 46



page 72



page 106



page 142



page 62



12 novembre

Se lever de bonne heure, retirer les housses des futons, passer l'aspirateur, laver le réfrigérateur de la grande cuisine... Les tâches ménagères avaient pris le dessus lorsque Zenjō est arrivé. Il fallait trouver d'urgence Megumi pour traduire : il avait pensé pendant la nuit à la conversation que nous avons eue la veille. J'avais parlé de convergence entre le catholicisme que l'on m'avait enseigné et le culte bouddhique enseigné au temple. Il proposait que nous rédigeons notre conversation. J'aurais aimé, mais c'était déjà le dernier jour. J'ai énoncé des exemples, il a pris des notes. Je ne saurai pas s'il a pu rédiger un article pour le journal qu'il édite et diffuse. J'aurais tellement aimé pouvoir parler avec lui. Je l'admire, sa tâche est lourde : d'abord, aller dans les familles réciter les sutras pour les mourants, puis les accompagner jusqu'aux rituels de la mort. Les fêtes joyeuses, comme les naissances ou les mariages, se font plutôt au temple shintō. Les jeunes sont partis et ne rentrent que pour les cérémonies funéraires. Dans son village, les adeptes du bouddhisme de la Terre Pure sont de plus en plus vieux et ils pensent que le mouvement va s'éteindre faute de jeunes vocations. Cependant, demain nous sommes attendues à Kyoto au temple central Nishi Hongwanji par Junjō, le fils de Zenjō. Il y fait ses études de théologie pour pouvoir succéder à son père. Nous devons aussi y rencontrer Naoki Nabeshima, son professeur de théologie, auteur d'un livre sur Misuzu Kaneko.

Dans l'après-midi, nous avons eu la visite au temple de Monsieur Fujii, accompagné d'un spécialiste de la littérature moderne, commentateur de l'œuvre de Misuzu Kaneko. Pour cette visite annoncée, Zenjō avait revêtu une élégante chasuble de soie. Nous étions reçus dans un petit salon à tatamis et à tables basses dont les baies donnaient sur le jardin intérieur. Tomoko, qui avait accueilli les visiteurs, à genoux front au sol dans un geste

plein d'énergie, a servi un thé vert japonais exceptionnel, au goût d'herbe fraîchement coupée, et s'est retirée aussitôt. Monsieur Fujii avait apporté des photocopies des registres de baleines. C'est notre dernière soirée au temple. Kinuko Hirakawa est venue m'offrir un pantalon de sa maman, qui n'avait pas été porté. Un pantalon comme celui que portent les vieilles paysannes et que je rêvais de rapporter en France. On n'en trouve plus aujourd'hui. Ce sera mon meilleur souvenir.

13 novembre, Kyoto

Hier matin, j'ai passé deux heures à regarder et à photographier les échoppes du marché Nishiki, cette fameuse rue où, m'avait dit Alain Ducasse, "on ne connaît pas 90% de ce qui se vend ! Ça rend modeste...". Je me suis acheté une petite pieuvre laquée, rouge, sur un bâton, que l'on tient comme une sucette, puis un sachet d'huîtres que j'ai mangées en me baladant. Mais ensuite aucune poubelle pour jeter mon sachet. Je me renseigne, elles ont toutes été retirées par crainte de terrorisme. Il n'y a pas de serviettes non plus, pas même dans les restaurants. Je comprends maintenant à quoi sert ce petit carré d'éponge plus petit qu'un mouchoir vendu partout. Tout le monde en a un sur soi sans doute.

Pour voir la ville, nous sommes allées par le bus au temple Nishi Hongwanji ou "Temple Ouest du Vœu Originel". C'est dans ce temple datant du treizième siècle que le Jōdo-Shinshū a pris naissance entre 1185 et 1333 avec Shiran Shonin, fondateur de l'"École Véritable de la Terre Pure", devenue la plus importante école bouddhiste au Japon. C'est ici que commence l'histoire du temple Kōganji de la famille Kamo. Fondé à Osaka, le temple a été déplacé plusieurs fois au cours des trois premiers siècles jusqu'au moment où il a obtenu les terres actuelles du daimyō et samouraï Hideyoshi Toyotomi, qui a financé la reconstruction de plusieurs temples à Kyoto. L'ensemble des bâtiments et l'enceinte elle-même sont impressionnants. Nous avons attendu Junjō dans un bâtiment réservé à l'accueil en regardant le vieux ginkgo biloba, planté là il y a des siècles, probablement témoin de la construction du temple actuel. Ensemble nous avons traversé la très grande cour pour arriver dans un long bâtiment où un moine nous attendait pour nous faire visiter la partie qui n'est pas ouverte au public. Le long d'une coursive de bois, les salons d'apparat couverts de tatamis se succèdent, sombres. Leurs murs vieil or et leurs cloisons coulissantes sont entièrement décorés de plantes, de tigres, d'oiseaux, aux couleurs éteintes par le temps. Nous arrivons au bord d'une cour aux graviers soigneusement ratissés ; là sont installés les tréteaux du théâtre Nō, le plus ancien

Nō-butai existant. On y joue une fois par an pour des invités choisis. La scène est étonnamment petite et à distance des spectateurs, qui sont probablement assis dans le salon à tatamis qui lui fait face, à moins que, peu nombreux, ils ne soient assis sur la large coursive où nous sommes : un sol de lattes de bois protégé par l'avancée de la toiture. Il est interdit de faire des photographies mais l'espace est si étonnant qu'il s'est gravé dans ma mémoire. Plus loin, on découvre un petit jardin de pierres et de pins miniatures. Puis il nous fait pénétrer dans les longs couloirs de bois sombre aux vieux *shōji* de *washi* – que nous appelons en France "papier de riz" mais qui est en fait fabriqué avec de la fibre de mûrier. Une fois ressortis des bâtiments, le moine qui nous accompagne ouvre une porte avec un sourire énigmatique. Nous découvrons ce qu'il était impossible d'imaginer là : le luxueux "pavillon des nuages flottants", avec son merveilleux jardin simulant la nature, son lac, sa rivière de pierres sèches, son sous-bois miniature et ses maisons de thé où on entre par une très petite porte obligeant à se baisser, "afin de laisser dehors tout sentiment de supériorité et d'orgueil"...

À l'extérieur de l'enceinte, un musée témoigne des voyages des moines à travers le monde, et donc aussi en France, un peu à la manière des Jésuites, prosélytisme en moins. Cela me rassure sur leur ouverture d'esprit et leur curiosité et donne à la proposition de Zenjō de faire un livre ensemble une vraie cohérence.



14 novembre

Avant notre rendez-vous pour déjeuner à l'Institut français avec Charles Henri Brossseau, je suis allée seule visiter le musée national de Kyoto, qui conserve un ensemble de trésors, peintures et sculptures provenant des temples du Kansai. C'était très inspirant d'être soudain aux racines chinoises de l'art japonais et de voir la manière dont textes calligraphiés et images peintes s'agencent sur les paravents, sur les *kakejiku* ou les longs rouleaux illustrés des scènes de la vie aristocratique. Presque en face, j'ai pu (rapidement) voir le temple Sanjusangen que je pouvais imaginer à partir des photographies de Hiroshi Sugimoto... Mille bouddhas dont les rayons d'or, se superposant, créent une vibration inconnue qui vous saisit dans l'instant. Par rangées de cent, sur dix estrades superposées, les statues d'or aux multiples bras, à taille humaine, semblables et différentes, sont autant d'interprétations du bodhisattva de la compassion, Kannon, de part et d'autre d'une gigantesque statue de Senju Kannon "aux mille bras et onze têtes". Kannon, assis – ou assise – à la droite d'Amida et regardant tous les hommes dans le bouddhisme de la Terre Pure.



15 novembre

Naoki Nabeshima nous avait donné rendez-vous dans un hôtel chic à côté de la gare. Jeune et élégant, souriant, il parlait anglais. Nous nous sommes immédiatement engagés dans une conversation passionnée sur l'interprétation des poèmes de Misuzu Kaneko : "La boue" et "Étoiles et pissenlits". J'ai compris pourquoi l'université bouddhiste Ryūkoku avait édité son livre sur Misuzu Kaneko. Nous avons aussi parlé des éditions Jula, de Setsuo Yazaki, découvreur et éditeur des poèmes de Misuzu Kaneko, et de Fusaé, sa fille toujours vivante. De la France et de son désir de la découvrir. Nous nous sommes quittés en espérant nous revoir à Paris.

Bibliographie

Pour la conception du livre et le choix des poèmes :

Tsutomu Konno, *Kaneko Misuzu futatabi*, Shōgakusan, Tokyo, 2011.

Setsuo Yazaki, *dōyō-shijin, Kaneko Misuzu no shōgai*, Jula, Tokyo, 1993.

Taiyō n° 122, édition spéciale du 100^e anniversaire de la naissance de Misuzu Kaneko, Heibon-sha, Tokyo, 2003.

Setsuo Yazaki, *Dōyō-shijin, Kaneko Misuzu : inochi to kokoro no uchū*, Jula Publishings, Tokyo, 2011.

Naoki Nabeshima, *Kaneko Misuzu inochi he no manazashi : hoshi to tanpopo*, Université Ryōkoku, Kyōto, 2012.

Pour la traduction :

Setsuo Yasaki, *Kaneko Misuzu zenshū*, Tokyo, 1984.

Yōko Shimada, *Kaneko Misuzu e no tabi*, Enshūkōbō Noa, Osaka, 1995.

Kaneko Misuzu sakuinkanshōjiten, Shitoshiron kenkyūkai, Tokyo, 2014.

謝辞

まず最初に加茂恵さんに感謝を捧げます。恵さんはバリで日本語を教えてくださいました私の先生であり、金子みすゞを私が発見したのは彼女のおかげでした。恵さんは日本への旅行を手配していただき、金子みすゞの詩にあわせて写真を撮影できるように、詩を訳してくださいました。

恵さんのご兄弟の加茂善成さんは、山口県の漁村・久津に近い白木の高岩寺の住職でいらっしゃいます。加茂善成さんは、恵さんの求めに応じて私を招いて、周辺の場所を案内してくださいました。私のプロジェクトをよく理解していただき、たくさんのお話を私にあたえてくださいました。加茂善成さんの奥様の智子様にも感謝を捧げます。つましく、とてもよく気を使う方でありました。

私が加茂善成さんから招かれた白木の向岸寺は、親鸞によって13世紀に創建された西本願寺に属しています。加茂善成さんは、ご尊父の加茂仰順さんの後を継いで向岸寺の住職になられました。加茂仰順さんはたくさんのお話を著した人で、その驚くべき書庫を私は見ることができました。ご尊父は向岸寺の住職をつとめた後、西本願寺と呼ばれ、龍谷大学の仏教学の教授になられました。いまは、加茂善成さんのお子息の一人が龍谷大学の学生として仏教学を修めていて、ゆくゆくは善成さんの後を継いで向岸寺の住職になられるでしょう。

加茂のりこ様は古市の西光寺の住職であり、恵さんの慈愛に満ちた義母でありました。

藤井文徳様は、地方文学の専門家であり、青海島の通いにあるくじら資料館の元館長であり、くじらの寺や金子みすゞが感銘を受けた場所について教えてくださいました。彼の曾祖母は、みすゞの父親の姉妹でありました。藤井文徳さまは、金子みすゞの伝記を表した高橋家の写真を私にくださり、詩を選ぶのにたいへん役に立った今野勉の本を貸してくださいました。

また、京都の龍谷大学の仏教学教授で金子みすゞの専門家である、鍋島直樹さんに感謝を捧げます。彼に会うことができたのは、加茂善成さんのおかげでした。

中屋義一さんと磯嶋正嗣さんは、久原という漁村で、早朝、魚の水揚げの場面を写真撮影させてくださいました。

島寿一明さんはブリなどを釣る漁師で、奥様の和江さんは雲丹やアワビを獲る海女でした。

奥藤恭二郎さんと奥様の貴美枝さんは久津の古民家に招いてくださいました。

私はまた「ほりけん笑顔の種まき詩人」さんに、彼の家である古民家の撮影を許していただいたことに感謝します。

平川絹子さんは、加茂善成さんの家から500メートルほど離れた隣家の人で、恵さんの友人でもあり、子どもたちを家に集めて写真の撮影をする手配をしてくださいました。

三宅幸宏さんは運転手として私をさまざまな場所に連れて行ってくれました。

小倉正史さんは美術史家・批評家で、フランスと日本の間の仲介者の役をつとめてくれました。

最後に、フランスでの私のアシスタントである小橋瑞穂さん、以上の方々に私の心からの謝辞を捧げます。

ジャクリーヌ・サルモン

ジュラ出版のきたおともこさん、元立命館大学の佐々木康之教授のご好意に感謝の意を表します。

ブリジット・アリユー（翻訳家）

この展覧会開催とカタログ出版にあたって、写真撮影を行ったアーティスト、フランスのカタログ発行人より、金子みすゞ記念館館長矢崎節夫さんが『金子みすゞ全集』を編纂されたことについて言及いたします。

Remerciements

Je remercie tout d’abord Megumi Kamo, ma professeure de japonais à Paris, qui m’a fait découvrir Misuzu Kaneko, qui a fait la première traduction d’un large choix de poèmes et qui a organisé le voyage ; Zenjō Kamo, son frère, supérieur du temple bouddhiste Kōganji à Shiraki, près du village de pêcheurs de Kuzu, dans la préfecture de Yamaguchi. Il m’a invitée à la demande de Megumi et nous a accompagnées dans les lieux environnants. Il a profondément compris mon projet et m’a donné de nombreux conseils. Il m’a aussi permis de visiter l’incroyable bibliothèque de son père, Gojun Kamo, auteur de nombreux livres, auquel il a succédé comme lui succèdera son fils aîné, étudiant à l’université de théologie Ryūkoku, où Gojun, son grand-père, était professeur lorsqu’il avait été appelé au temple central Nishi-Honganji à Kyoto.

Je remercie aussi Tomoko, l’épouse de Zenjō, discrète et attentive ; Noriko Kamo, qui fut l’épouse de Gojun Kamo, belle-mère affectueuse de Megumi, supérieure du temple bouddhiste Saikōji à Furuichi ; Kinuko Hirakawa, son amie et ma meilleure assistante. C’est elle qui a sélectionné temples et plages et qui a organisé la rencontre avec les enfants autour de la maison de Yuzan Inoué ; Ken Horinouchi, un voisin performeur et calligraphe, qui a fait le pari de vivre à la campagne comme autrefois et qui m’a laissé visiter et photographe sa maison.

Je remercie les pêcheurs Kiichi Nakaya et Masatsugu Isojima, qui m’ont accueillie au lever du jour dans le petit port de Kubara ; Monsieur Shimazu et Kazué, sa femme *ama*, pêcheuse d’oursins à Ōura.

Je remercie Kyojiro et Kimié Okuto, à Kuzu, qui m’ont fait visiter la maison voisine de la leur, qu’ils ont achetée parce qu’elle était ancienne et n’avait pas été transformée. Ils y collectionnent les plats de porcelaine de l’époque Edo qui ont été jetés par les gens.

Je remercie Fuminori Fujii, spécialiste de littérature régionale, ancien directeur du musée de la baleine sur l’île Omishima, qui m’a accompagnée, m’expliquant les lieux dont s’était inspirée Misuzu Kaneko, et qui m’a fait connaître le chant incantatoire des pêcheurs de baleines, psalmodié par Yoshikatsu Haykawa, chef de la dix-huitième génération dans le village de Kayoi. Son arrière-grand-mère était la sœur du père de Misuzu. Il m’a donné les photographies de la famille Takahashi pour illustrer la biographie de Misuzu Kaneko et prêté le livre de Tsutomu Konno, qui a été extrêmement précieux pour le choix des poèmes.

Je remercie Sachihito Miyake, notre chauffeur.

Je dois encore remercier le professeur Naoki Nabeshima, de l’université de théologie bouddhiste de Ryūkoku à Kyoto, auteur d’un livre sur Misuzu Kaneko, que j’ai pu rencontrer à Kyoto grâce à Zenjō Kamo.

Je remercie Masashi Ogura, historien de l’art, mon ambassadeur entre la France et le Japon, Mizuho Kobashi mon assistante en France, et également Yukiko Mihara.

Brigitte Allieux remercie Tomoko Kitao, de Jula Publishings, pour son aide bienveillante. Un remerciement particulièrement chaleureux va à Yasuyuki Sasaki, professeur émérite de l’université de Ritsumeikan à Kyōto, pour avoir relu cette traduction.

Ce quatrième volume de la collection PO&PSY *a parte*
dirigée par Danièle Faugeras et Pascale Janot
et publiée par les éditions érès pour le plaisir de leurs amis
a été achevé d'imprimer en septembre 2018
sur les presses de l'imprimerie Mondial Livre à Nîmes
www.mondial-livre.com

